

# 九十九里浜における観光の地域的特性

## －白子町中里地区のテニス民宿を事例に－

井口 梓・小島大輔・中村裕子・星 政臣・金 玉実  
渡邊敬逸・田林 明・トム・ワルデチュク

キーワード：テニス民宿，海水浴，観光，地域社会，九十九里浜，白子町

### I はじめに

#### I-1 研究の課題

千葉県白子町では、山梨県山中湖村や長野県軽井沢町とともに、日本でも有数のテニス民宿地域が形成されている<sup>1)</sup>。この報告は、白子町中里地区を事例として、観光地域の主要構成要素であるテニス民宿の発展過程と現在の経営の分析から、この地域の観光の分析を明らかにしようとするものである。

1960年代の高度経済成長に入って国民の所得水準が向上し、観光ブームが到来した。主な観光旅行形態は団体旅行によるもので、目的地となった温泉地では、大型の温泉旅館が急速に増加した<sup>2)</sup>。また、国立公園や国定公園の指定地が増え、そこにも観光客が押し寄せた。そして、この時期には各地でスキー場やゴルフ場がつくられ、さらに多くの別荘地開発が進められた。海岸地域では海水浴場が整備されて、農漁家の民宿が急増した。石油ショック後の低成長期から安定成長期に移行した1970年代後半から、これまでの「みる」観光に、「する」観光のスポーツ旅行や体験旅行が加わり、さらには保養や休養などの「滞在型の旅行」も増加した<sup>3)</sup>。

国民のための滞在型リゾートを整備するために「総合保養地整備法（リゾート法）」が制定された

のは1987年であった。バブル経済期の影響を受け、ゴルフ場やスキー場、マリーナ、テーマパーク、リゾートマンションなどの大規模な観光施設の建設が計画された<sup>4)</sup>。しかし、このようなリゾート開発はバブル経済の崩壊とともに自然消滅するようになり、開設当初はにぎわったテーマパークも、経営不振に陥るものがでてきた。近年では、大規模観光開発に代わる地域振興策が模索されるようになり、それぞれの地域の自然や歴史、文化を対象とした新しい観光形態が出現してきた。その一つとしてグリーンツーリズムに関心が集まるようになっている<sup>5)</sup>。

このような第2次世界大戦後の観光の推移をみると、観光が大量化・大衆化し国民に広く浸透したのは高度経済成長期であり、多くの観光施設や宿泊施設が立地し、今日の観光地域の原型ができあがったのがこの時期であった。研究対象とする九十九里浜でもまさにこの時期に海水浴客のための海の家や季節民宿がつくられ、それが契機となって観光地化の歩みが始まった。その後の観光地域は高度経済から低成長・安定成長、バブル経済とその崩壊、そして長期にわたる経済不況と、時代に大きく規定されながら変化してきた。そこで、この報告では、海水浴の季節民宿地域がどのようにテニス民宿地域に発展したのか、その要因にはどのようなものがあつたのか、さらに現在ど

のように変化しつつあるのかを明らかにする。

ところで、スキーや海水浴などのスポーツ・レクリエーションの発展とそれに伴う民宿地域の形成に関しては多くの研究の蓄積がある。石井(1970)は全国の民宿地域を類型化し、海浜型民宿地域と山地型民宿地域に分けた<sup>6)</sup>。そしてスキー場と結びついて発展してきたものが多い山地型民宿地域の事例として長野県白馬村を取り上げ、積雪寒冷地という自然環境とそれに由来する産業基盤と民宿との結合がうまくなされたことが、白馬村の発展につながったことを明らかにした<sup>7)</sup>。山本ら(1981)は冬季のスキー民宿と夏季の野菜栽培を組み合わせることによって発展してきた菅平を取り上げた<sup>8)</sup>。この地域は、一見不利にみえる自然条件ばかりではなく社会・経済条件を巧みに生かして、高い生産性を誇るようになったが、農業の集約化と観光業の周年化の動きによって、これまでの均衡がくずれはじめた。新藤ら(2003)は菅平においてラグビーグラウンドやテニスコートの増加により、ますます観光業の周年化が進んでいることを明らかにしている<sup>9)</sup>。白坂(1986)はスキー場の存在が、その集落形成において重要な役割を演じ、スキー場と集落が、ひとつの有機体としての機能を持つ場合を「スキー集落」と規定した<sup>10)</sup>。そして、野沢温泉や志賀高原、柵池高原などにおいて民宿を重要な構成要素とする集落の発展過程について明らかにしている。また、呉羽(1991)は片品村において首都圏からの交通の利便性と広大な共有林野という基盤を活用し、民宿やペンション、ホテルなど多様な宿泊施設を供給することで、スキー観光地が発達したことを明らかにした<sup>11)</sup>。

他方、石井が指摘した海浜型民宿地域における研究事例も多い。まず、南伊豆では臨海地としての地理的条件が、それに由来する産業基盤などの地域特性と近年の観光需要が結びついて、民宿地域が形成された<sup>12)</sup>。尾留川・山本ら(1978)による南伊豆の沿岸集落における一連の研究でも、このことが明らかにされている<sup>13)</sup>。淡野(1985)は三重県鳥羽市相差地区の事例で、遊泳可能な砂

浜が存在し、必要労働力が確保できたことが、民宿地域形成の基本的な条件であることを指摘した。また、他の海水浴場との関係、交通手段の整備や鉄道資本による働きかけも重要な役割を果たしたことを明らかにした<sup>14)</sup>。また、九十九里浜に関する研究としては、関(1976)のものがあり、九十九里浜は典型的な夏季一季型の海水浴型観光地で、東京を主とする大都市依存型の観光地であることを明らかにした<sup>15)</sup>。そして、白子町のテニス民宿のように、積極的に周年化をはかり、専業へ移行するものも現れていることを指摘している。宇都木ら(1996)<sup>16)</sup>や山村(1995)<sup>17)</sup>は、白子町中里地区において、高度経済成長期からバブル経済期までに、順調にテニス民宿が成長・発展してきた状況を明らかにしている。

以上のように民宿地域については多くの研究が蓄積されてきた。これらの地域の多くは当初、夏季もしくは冬季の一季型の観光地であったため、専門的な民宿は成立しなかった。しかし、いずれの観光地も周年化し、専門的な民宿経営を確立していく傾向にあり、その点では白子町のテニス民宿地域を一つの典型としてみるができる。ここでは、その過程を個々の民宿経営の動向と民宿相互の関係に着目して明らかにする。バブル経済崩壊後の長引く不況によって、全国の観光地域は大きな影響を受け、それを乗り切るために様々な努力をしているが、白子町のテニス民宿地域ではどのような形で、不況に対応しているのだろうか。これらを明らかにするのもこの報告の課題である。なお、現在の白子町には収容人数が数10人程度の宿泊施設や数百人規模のホテル形式のものがあるが、ここでは便宜的に「民宿」と呼ぶことにする。

## I-2 研究対象地域の概要

九十九里浜は、北東の行部岬から南西の太東崎までの約56kmにわたる九十九里海岸を含む飯岡町と旭市、八日市場市、野栄町、光町、横芝町、蓮沼村、成東町、九十九里町、大網白里町、白子町、長生村、一宮町の13市町村からなる<sup>18)</sup>。九十九里

浜を含む九十九里平野は、沿岸州が形成されていた海底が隆起した海岸平野である。したがって海岸線に平行する数条の砂堆地と、砂堆地間の低湿地から構成される。集落と田畑、林野等はこの地形に適応して配置されている<sup>19)</sup>。すなわち砂堆地は村落・畑・道路・平地林として、低湿地は水田や溜池として利用されていた。

九十九里平野の気候は概して温暖である。降水量は1、2月に少なく、3月中旬から徐々に多くなり、11月半ばを過ぎると晴天が続くようになる。降雪はほとんどなく、初霜は11月20日前後である。日本のほぼ同緯度の内陸地域と比べると海洋性気候の性質が強く、ミカン類も栽培可能であり、温暖性の植物の生育も良好である。

九十九里平野の集落は最も多いところで、南北に延びる8列の砂堆の上に立地しているが、これらの集落は内陸側から岡、新田、納屋または浜、下といった語尾を持つものが多い。これは、中世に形成された岡集落から近世中期に新田の開発が行われ、岡集落を親村とする子村として新田集落が形成されたことによるものである。さらに近世後期の地曳網漁業と結びついて、岡集落・新田集落から人々が海岸に移動し納屋集落が形成された。これらの集落の形成にはイワシの豊凶や海岸の前進が大きく関係しており、岡集落から新田集落、そして納屋集落と単純に形成されてきたわけではない。まず、イワシの豊漁期に岡集落から海岸に人口が移動し納屋集落が形成された。しかし、不漁期が来ると、納屋集落の位置に新田が開発された<sup>20)</sup>。このように農村的性格が強まった状態が100年ほど続き、次の豊漁期が来ると、岡・新田集落から海岸に人口が移動して納屋集落をつくった。

九十九里平野では古くから旱魃や水不足に悩まされてきた。しかし、大利根用水と両総用水の2つの用水路の完成によって、農業の生産性は大いに向上した<sup>21)</sup>。こうして、九十九里平野の水田は、房総半島における一大穀倉地帯となった。その一方で、近年の耕地整備の進行や米の生産調整政策による転作の奨励、野菜類や花卉類の需要の増

大、交通機関の発達などを背景として、この地域においても園芸農業が盛んに行われるようになった<sup>22)</sup>。

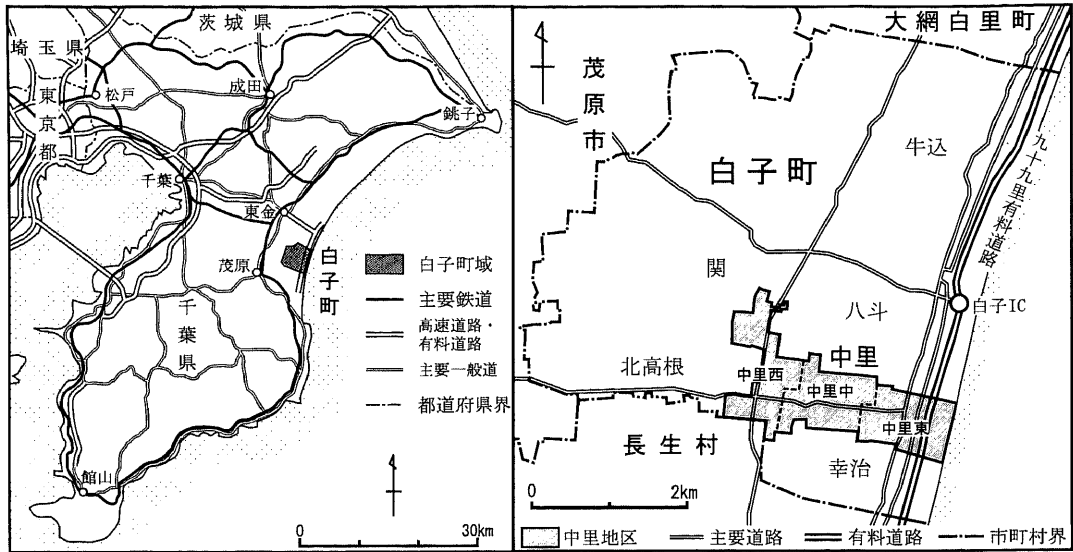
九十九里浜では江戸期以来イワシの地引網が盛んに行われ、明治後期以後はこれに代わって揚繰網漁業が盛んとなり、これらの水産業に従事するものも少なくなかった。しかし現在では、九十九里浜における水産業は衰退する傾向にある。しかし、そういった中でも飯岡町や九十九里町のように砂浜海岸に近代的な港が建設された地域や、水産加工場が集中する地域では、水産業とその関連産業が盛んである<sup>23)</sup>。その一方で、海岸沿いには高度経済成長期以降、夏季に多数の海水浴客が訪れるようになった。そのため、海岸沿いの納屋集落は夏季の海水浴のための民宿を中心とする観光集落へと変貌を遂げた<sup>24)</sup>。

中里地区が位置する白子町は1955年に旧長生郡の白潟町と関村、南白亀村が合併して誕生した町で、千葉県ほぼ中央部の東に位置する。町の東部は九十九里海岸で、砂浜と松林が続いている。西を茂原市に、北を大網白里町に、南を長生村に接し(第1図)、町の面積は27.03km<sup>2</sup>である。

白子町も海岸線に平行した砂堆と低湿地の連続からなり、これが北北東から南南西の方向で6列みられる。また、土地利用はこの特有な地形に規定され、集落や畑が砂堆上に分布し、低湿地には水田が分布する<sup>25)</sup>。

銚子地方気象台茂原観測所の1979年から2000年のデータによると、白子町の年平均気温は15.1℃、年平均降水量は1617.6mm、最寒月の年平均気温が1月で4.9℃、最暖月の年平均気温が8月で26.0℃となっている<sup>26)</sup>。冬季に暖かく、夏季に涼しい気候を示している。

白子町の人口は、第2次世界大戦後徐々に減少し続け、1970年には11,237人となったが、その後微増に転じ、2005年には13,516人とほぼ50年前の人数を回復した。産業構造については、1970年までは第1次産業が優位であったが、1980年には第1・2・3次産業のそれぞれの割合が30%代とほぼ同数になり、それ以降は第1次産業が減少し続



第1図 研究対象地域

け、第3次産業が優位となっていった。

## II 九十九里浜における産業の変化

### II-1 九十九里浜の第1次産業の推移

1970年には千葉県の就業者比率は、第1次産業で22.4%、第2次産業で31.7%、第3次産業で45.8%であったのに対して、九十九里浜においてはそれぞれ46.0%、21.2%、32.8%であった。

ところが2000年になると、千葉県の就業者比率は、第1次産業で3.9%、第2次産業で24.7%、第3次産業で69.6%であったのに対して、九十九里浜においてはそれぞれ14.0%、29.2%、56.8%となった。このように、千葉県では全体として第1次産業就業者比率は大幅に減少し、第3次産業のそれは増加しているものの、九十九里浜における第1次産業の重要性は現在でも高いと考えられる。

ここで九十九里平野における農業就業者率の変化をみると、1970年では沿岸部で低い値を示し、それより少し内陸部に入ると高い値を示している(第2図)。さらに内陸部に入ると帯状に低い値を示す地域が現れ、さらにそれよりも内陸部に入ると高い地域が現れる。このように、九十九里海岸

に並行する形で農業就業率が高い地域と低い地域が交互に現れるのは、九十九里平野特有の砂堆地とその間の湿地から構成される地形の影響が大きいと考えられる。この特徴は2000年においても確認することができる。1970年においては、八日市場市や野栄町、光町、横芝町といった中央部からやや北側の地域にとくに高い値が集中していた。飯岡町の東部や大網白里町の西部、一宮町の南部において比較的高い値がみられたものの、それ以外は平均値またはそれより低い値を示した。1980年や1990年になるにつれて、全体的に農業就業率は低下するが、とくに南東部でその傾向が著しかった。しかし、基本的な分布パターンは続いた。2000年においては、飯岡町や旭市の北部、八日市場市東部、野栄町の西部、横芝町の西部といった地域に局所的に高い値が分布している。これらはそれぞれ、飯岡町のパセリ・露地メロン栽培や旭市の大規模な施設園芸団地、八日市場市の植木生産、野栄町の畜産によるものであると考えられる。また南西部においては全体的に低い値となっているが、一宮町や白子町では部分的にガラスハウスを用いた施設園芸農業が盛んであり、値の高い箇所がみられる。

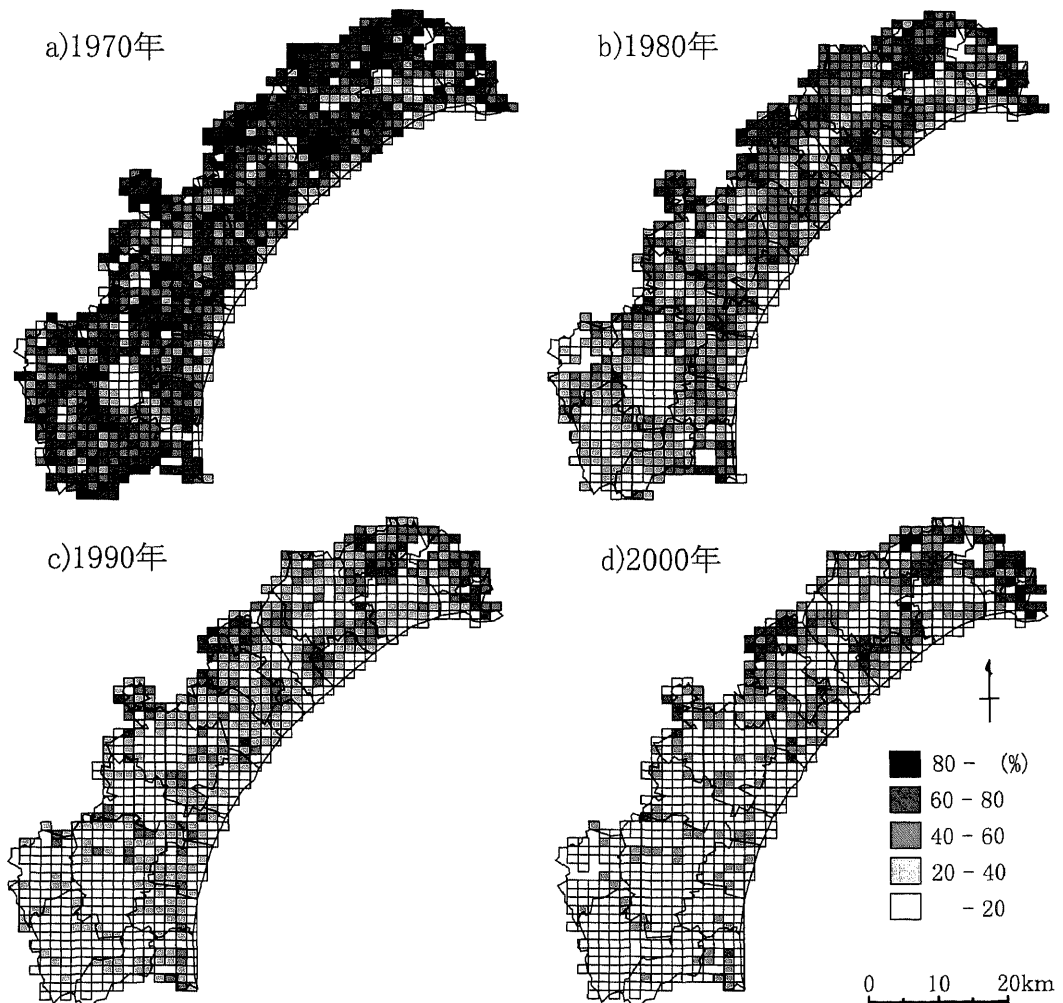
次に、水産業就業者率についてであるが、1970年には九十九里浜全体の平均値である1.59%に比べて野栄町は6.30%、九十九里町は5.1%と高い値を示していた。2000年には九十九里浜全体の平均値が0.45%に低下し、九十九里町でも0.91%に低下した。しかし、2003年の水産加工従事者の割合では、九十九里浜全体の平均値が1.12%であるのに対して、九十九里町は6.14%と著しく高い。

## II-2 観光地化の進展

九十九里海岸の観光は、一宮町と九十九里町を中心として、第2次世界大戦前から発展した。

1896年に、当時の一宮町長が神奈川県の大磯を参考に別荘開発を基盤とした海水浴場開発を計画したが実現しなかった<sup>27)</sup>。しかし、1901年に一宮町において海軍次官の別荘の建設を契機に別荘地が増加し、1911年には海水浴場も開設されることとなった<sup>28)</sup>。

一方、1902年に九十九里町の片貝地区の西の下海岸に無料休憩所が設置され、九十九里浜における最初の海水浴場が成立した。1930年代には、第2次世界大戦前における海水浴客の最盛期を迎え、北部の飯岡町矢指海岸においても別荘が増加した。また、1935年には、この地域が九十九里県



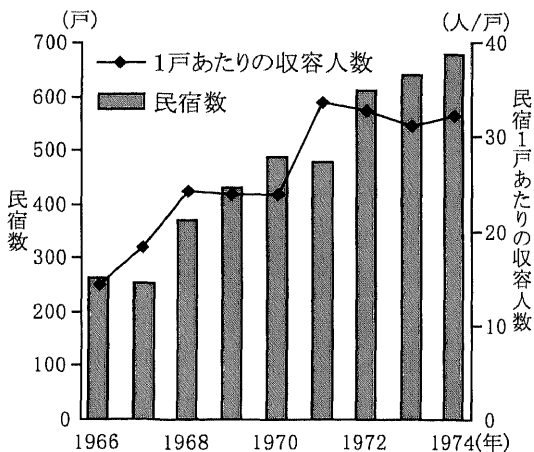
第2図 九十九里平野における農業就業者率の推移

(各年次国税調査メッシュデータセットにより作成)

立公園に指定され、1936年の九十九里海岸への避暑客は431,838人に達している<sup>29)</sup>。

第2次世界大戦後およそ20年間は、観光業より農業や水産業の振興に力が注がれ、観光業への関心は低かった<sup>30)</sup>。また、元来九十九里浜は海水浴場としては波が荒く、外房および内房と競合するのが困難であった<sup>31)</sup>。

しかし、1960年代中頃に海水浴ブームがおきると九十九里浜は急速に観光地化した。1970年代前半までに海岸沿いに6つの国民宿舎が相次いで設置され、それらの影響を受け、周辺の海岸沿いには多くの季節民宿が開業した<sup>32)</sup>。1960年から1972年までに、九十九里浜における民宿数は2倍以上となり、なおかつ民宿1戸あたりの収容人数も2倍以上に増加し30人を超えた(第3図)。このような民宿の増加と規模の拡大により、海水浴客も増加した。千葉県内の地域別の海水浴客の推移をみると、九十九里浜(海匝、山武および長生の3地域)は、年による変動はあるものの、1974年のおよそ300万人という値を、基本的には維持し続けている(第4図)。しかし、千葉県内のその他



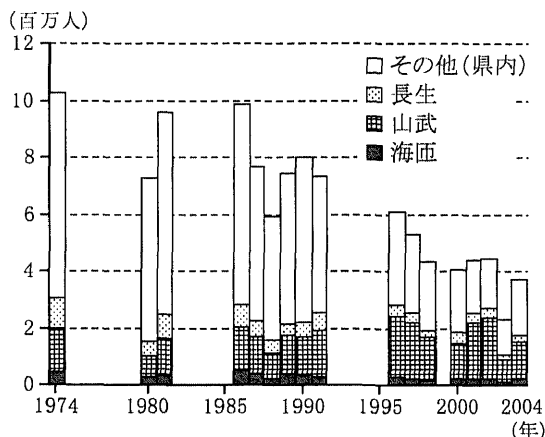
第3図 九十九里地域における民宿数および1戸あたりの収容人数の推移(1966～1974年)

注: 九十九里地域とは、現在の銚子市、八日市場市、旭市、海上町、飯岡町、光町、野栄町、東金市、大網白里町、九十九里町、成東町、山武町、蓮沼村、松尾町、横芝町、芝山町、茂原市、一宮町、睦沢町、長生村、白子町、長南町の領域を指す。

(千葉県「観光統計概要」より作成)

の地域の海水浴客は1980年代から1990年代にはおよそ半分にまで減少した。その結果、千葉県全体の海水浴客に占める九十九里浜の割合は大きく増加した。現在、九十九里浜は千葉県への海水浴客のおよそ半数を占めるようになり、30か所を超える海水浴場が設けられている。

この要因として最も重要なものは、1960年代後半より東京からの交通網が大きく改善されたことである。まず、1969年に京葉有料道路が開通し、東京―千葉市間の時間距離が短縮された。次いで1972年には九十九里有料道路が開通し、九十九里浜南部を南北に貫く幹線ができた。その後、1979年には千葉東金道路の第一区間(千葉東―東金)が開通し、東京や千葉から山武地域へのアクセスが大幅に改善された。翌年の1980年には、千葉外房有料道路が開通し、長生地域の利便性が向上した。その後、1998年の東金九十九里道路、および



第4図 千葉県における地域別海水浴客数(1974～2004年)

注1: 各地域は以下に示した現在の市町村の領域を指す。

海匝地域: 銚子市、八日市場市、旭市、海上町、飯岡町、光町および野栄町

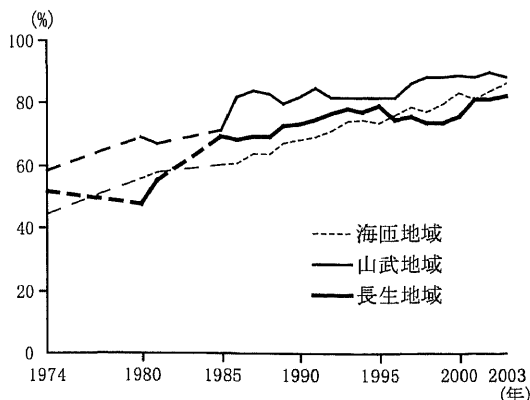
山武地域: 東金市、大網白里町、九十九里町、成東町、山武町、蓮沼村、松尾町、横芝町および芝山町。

長生地域: 茂原市、一宮町、睦沢町、長生村、白子町および長南町

注2: 2000年より統計方法が変更。

注3: 1975～1979, 1982～1995, 1999年はデータ欠。

(千葉県「観光統計概要」および「観光入込調査概要」より作成)

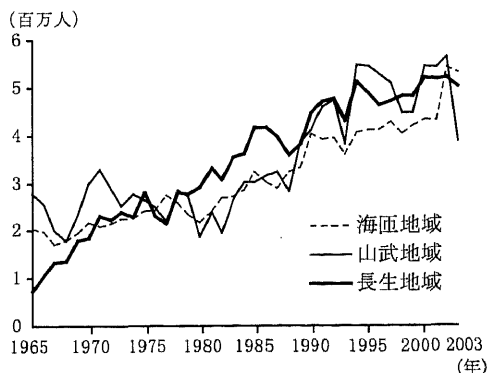


第5図 九十九里地域における観光入込客数に占める自家用車使用客の割合

注1：各地域の領域は第4図に同じ。

注2：1975～1979, 1982～1984年はデータ欠。

(千葉県「観光統計概要」および「観光入込調査概要」より作成)



第6図 九十九里地域における観光入込客数の推移(1965～2003年)

注：各地域の領域は第4図に同じ。

(千葉県「観光統計概要」および「観光入込調査概要」より作成)

千葉東金道路の第二区間(東金—松尾横芝)の開通によりさらに山武・海匝地域の交通網が改善され、モータリゼーションの強い影響を受けることとなった(第5図)。この結果、九十九里浜は東京の日帰り集客圏に組み込まれ、観光入込客総数に占める日帰り客も1974年には80.8%であったものが、2000年には89.5%に増加した。

次に、観光客全体の推移を検討する。1960年代の後半から現在まで、長生地域は年次による違いはあるものの、ほぼ同様の観光客数の増加率を維持したまま現在まで発展を続けている(第6図)。一方、海匝と山武の2地域は、1980年代前半まで停滞を続けていたが、1980年代後半から急激な増加を経て現在に至っている。このように、九十九里浜では、場所によって観光客数の推移に差がある。これについては、上述したモータリゼーションの進展とともに、海水浴以外の観光形態についても注目する必要がある。以下では、九十九里浜の観光形態の変化について市町村単位で検討する。

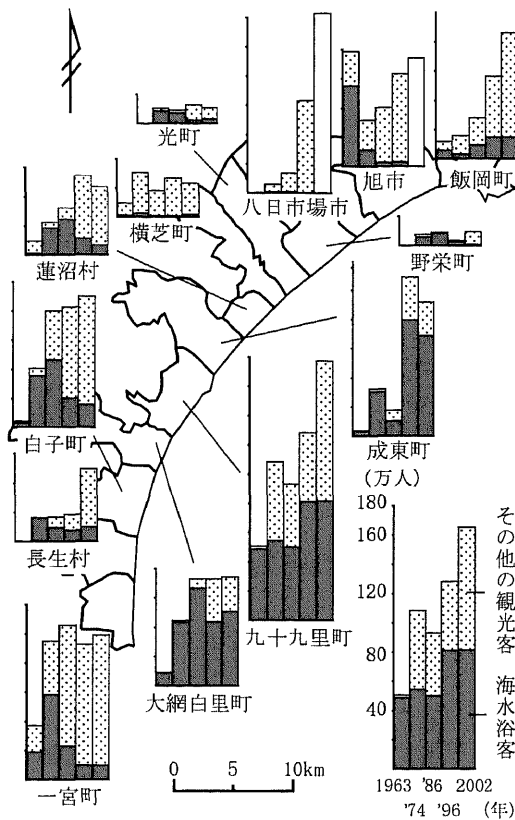
1970年に建設省が「新全国総合開発計画」で構想したレクリエーション都市整備要綱が決定された。しかし、地元への説明が行われ、用地取得交渉が進み、実際に計画が進捗したのは九十九里浜

中部(蓮沼村)であった<sup>33)</sup>。その結果、1975年に「蓮沼ウォーター・ガーデン」が開設され、それを端緒に、ガーデンハウス、公園施設、スポーツクラブなどの施設が加えられた。これらは現在では「蓮沼海浜公園」となっており、年間28万人の集客を誇る施設となった。このほかに、1972年には横芝町に千葉県最初の大型プール施設の「横芝海のこどもの国」(2003年廃止)が建設され、さらに1975年には白子町に「白子ラクダの国」(現在廃止)、1982年には九十九里町に「九十九里いわし博物館」(現在休館)が建設された。また1990年には白子町に日本初の人工砂風呂である「白子町アクア健康センター」(当時「白子町営砂風呂」)そして2000年に、長生村に「オーシャンスパ九十九里・太陽の里」などの大型の集客施設が設置された。これら大規模施設に加え、夏季を中心とした季節型の観光形態からの脱却をねらった新たな観光資源の創出が行われた。

九十九里浜では、海水浴客とその他の観光客の増減と両者の比率に注目すると、多くの観光客を受け入れる市町村は大きく3つのタイプに分類することができる(第7図)。まず第1の類型は、海水浴客が主要な観光客となっているもので、山武地域の九十九里町、成東町および大網白里町が

これにあたる。次に、かつては海水浴が主要であったが現在その重要性は低下しているもので、旭市や一宮町、白子町がこれに該当する。3つ目は、海水浴がいずれの年も主要ではないもので、八日市場市や飯岡町がこれにあたる。

このように、九十九里浜の各市町村の観光形態は多様化している（第1表）。しかし、海水浴以外の観光は、祭りなどのイベント、海浜レクリエーション、スポーツなど市町村により様々であるが、いずれも夏季を中心とするものが多い。すなわち、1970年代から現在まで、九十九里浜の観光は



第7図 九十九里浜の市町村における観光入込客数の推移

(1963, 1974, 1986, 1996, 2002年)

注1：八日市場市、野栄町および光町についての1963年の入込客数は不明。

注2：旭市および八日市場市についての2002年の海水浴客数は不明であり、観光入込客総数を示した。

(千葉県「観光統計概要」および「観光入込調査概要」より作成)

第1表 九十九里浜における主要観光資源 (2004年)

市町村名	観光資源	入込数(万人)
飯岡町	飯岡刑部岬展望館	23
	飯岡海岸(サーフィン)	22
	飯岡みなと公園	16
旭市	旭市七夕市民まつり	17
	鎌数伊勢大神宮	12
	矢指ヶ浦海水浴場	3
八日市場市	ふれあいパーク八日市場	124
	八重垣神社祇園祭	5
	駒まね・市場まつり	2
野栄町	産業まつり	2
	チューリップまつり	2
	野手浜海岸(サーフィン)	1
光町	産業まつり・文化祭	6
	木戸浜海水浴場	3
	光スポーツ公園	1
横芝町	花火大会	6
	ゴルフ場	4
	屋形海水浴場	3
蓮沼村	蓮沼海浜公園	28
	蓮沼ウォーターガーデン	16
	サマーカーニバル in 蓮沼	4
成東町	海水浴場(3ヶ所)	21
	いちご園	14
	九十九里自然公園	4
九十九里町	海水浴場(4ヶ所)	71
	九十九里ふるさと自然公園	69
	サンライズ九十九里(プール)	9
大網白里町	海水浴場(3ヶ所)	24
	ゴルフ場(3ヶ所)	11
	白里海岸	3
白子町	白子温泉	48
	テニス村	37
	白子海水浴場	12
長生村	太陽の里	23
	一松海水浴場	6
	長生フットボールパーク	2
一宮町	海岸(3ヶ所, サーフィン)	42
	海水浴場(2ヶ所)	8
	一宮町納涼花火大会	6

注1：ここでの主要観光資源とは、入込数が各市町村上位3位以内のものとする。

(千葉県「観光入込調査概要 平成16年」より作成)



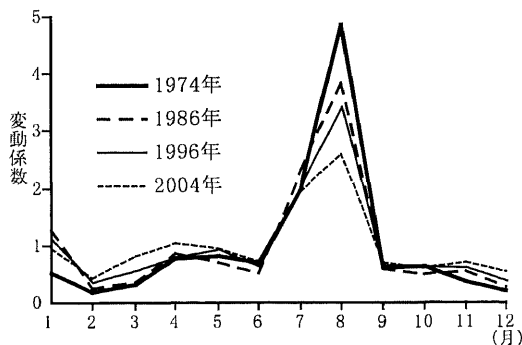
徐々に周年化されているものの、季節的な多様性は十分に獲得しきれていない（第8図）。これは、九十九里浜へのアクセシビリティが向上し、その多くが日帰り客となっているため、宿泊を前提とした観光形態の発展を困難にしている。

### Ⅲ 中里地区における産業と土地利用の変化

#### Ⅲ-1 白子町における農業の変容

白子町では周辺の沿岸集落と同様にかつては内陸部では稲作を中心とした農業を行い、沿岸部ではイワシの地引網漁を中心とする漁業が行われていた。白子町の漁業の歴史は古く500年以上前までさかのぼることができる。漁業は元来、豊漁と不漁によって消長を繰り返すものであり、白子町の漁業も昭和期の不漁により衰退し、多くの集落は農業を生業とするようになった。一方で、白子町は、晴天が続けばたちまち早魃で苦しめられるという干害常習地帯であった。しかし、1965年に完成した両総用水事業によって農地は著しく整備・改善され、生産性が向上した<sup>34)</sup>。

白子町における専業別農家数の推移をみると、1950年から1960年は専業農家や第1種兼業農家の戸数が多かった（第9図）。1960年から1970年にかけては専業農家が減少し、第1種兼業農家および第2種兼業農家の戸数が増加したが、依然とし



第8図 九十九里地域における観光入込客数の季節変動（1974、1986、1990、2004年）

注1：九十九里地域の領域は第3図に同じ。

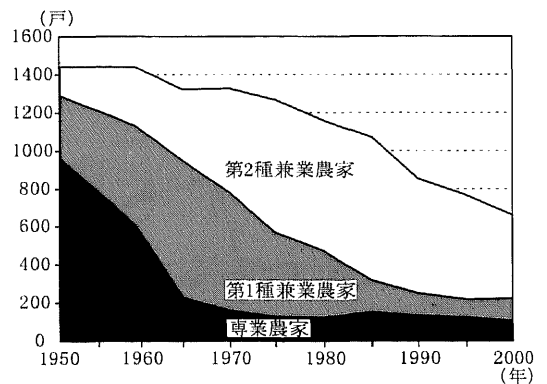
注2：変動係数＝（月別入込客数×12）／年間入込客数。

（千葉県「観光統計概要」および「観光入込調査概要」より作成）

て専業農家と第1種兼業農家の戸数は比較的多かった。しかし、1970年以降、第1種兼業農家が激減し、農業を主とする農家はわずかになってしまった。また、白子町における農産物の収穫面積の推移をみると、1960年まで稲、麦類、いも類などの収穫面積が大きかったが、それ以降麦類といも類は減少し、代わってタマネギなどの野菜類や落花生などの工芸作物類が急増した（第10図）。タマネギは1964年にマルチング栽培が導入され、1966年には白子町が国の指定産地となったことによって普及した。また、落花生の増加は周辺の下総台地における栽培奨励の影響を受けたものである。しかし、タマネギや落花生の栽培は1965年をピークに減少に転じた。

このように白子町では、第2次世界大戦後から1970年までは積極的に農業経営を行う人々が多かったが、1970年以降、商業的農業経営は衰退し、自給的な性格の強い農業経営が主体となった。しかし、施設園芸農業を行う積極的な農業経営者も少数ではあるが存在している。

白子町で農家数が最も多いのは関地区であるが、それに続くのが牛込、剃金、古所、中里といった九十九里海岸沿いの地区である（第11図）。関や北高根といった茂原市と接する内陸部の地区では、兼業農家の割合が高くなっている。その一方で、九十九里海岸沿いの地区では、専業農家と第1種兼業農家の割合が高く、とくに剃金地区と中

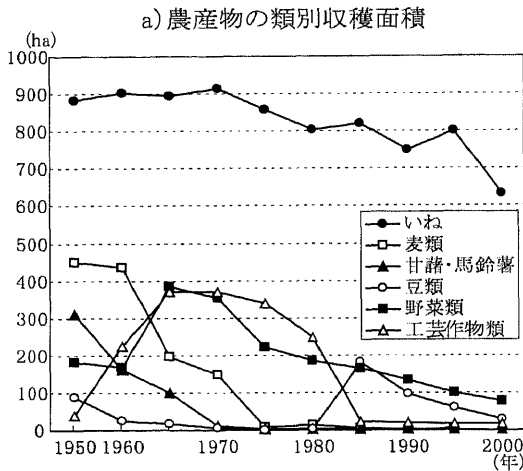


第9図 白子町における専業別農家数の推移（農業センサスより作成）

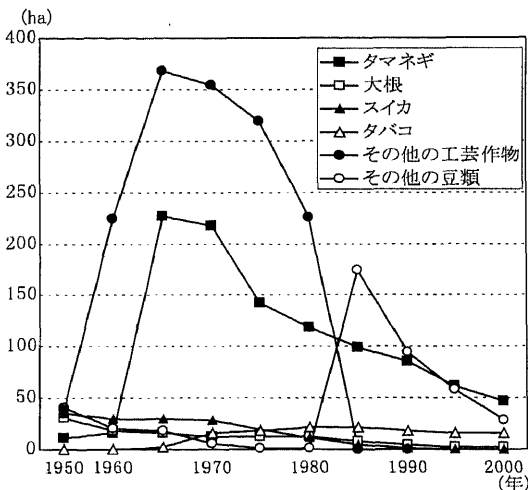
里地区ではその傾向が強い。

研究対象地域の中里地区では、1970年には中里西および中里中において、専業農家と第1種兼業農家をあわせた割合が50%を上回っていた。一方、中里東では第2種兼業農家の割合が半数を超えていた。1980年になると中里中・中里西においては専業農家と第1種兼業農家をあわせた割合が減少したものの、総農家数はほとんど変化しなかった。一方、中里東においては第2種兼業農家だけ

になり、総農家数も減少した。1990年になると中里中・中里西においては総農家数が漸減したものの、専業農家と第1種兼業農家をあわせた割合は1980年と変わらなかった。一方、中里東においては第2種兼業農家のみでその農家数も急激に減少した。2000年になると中里中・中里西においては総農家数の漸減がみられたが、専業農家と第1種兼業農家をあわせた割合が1990年よりも高くなった。一方、中里東では農家数が一層減少した。

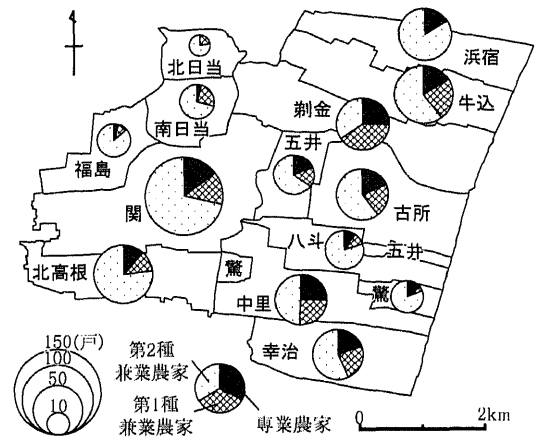


b) 野菜類、工芸作物類、豆類の作物別収穫面積



第10図 白子町における主要農産物の収穫面積の推移

注：2000年は販売農家，その他は総農家の数値である。  
(農業センサスより作成)



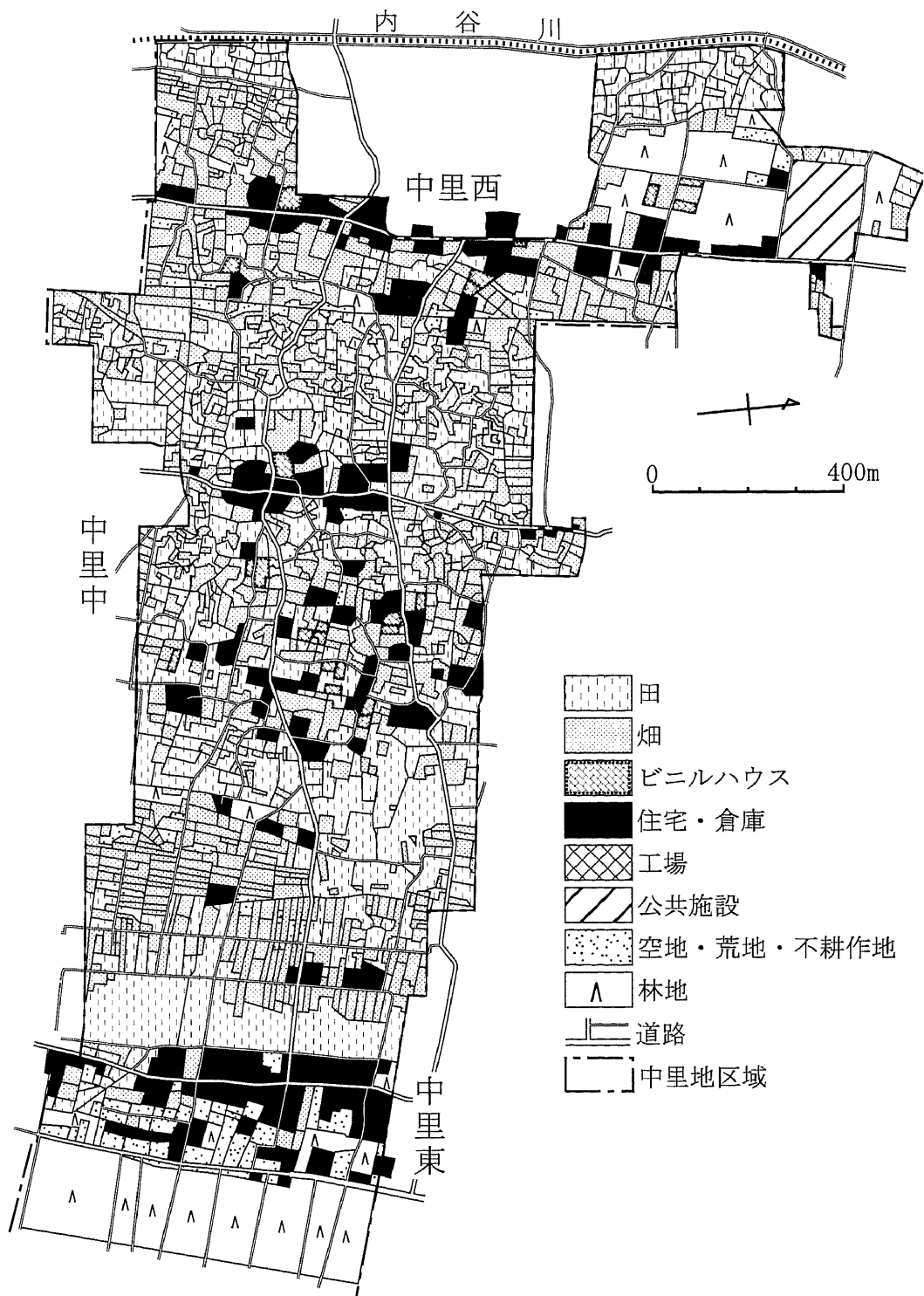
第11図 白子町における地区別農家数および専業業別農家割合（2000年）  
(農業センサスより作成)

### Ⅲ-2 中里地区における土地利用の変化

前述のように、1960年以降中里地区における産業構造は大きく変化した。次に土地利用から地域の変化を検討することにしてしよう。

#### 1) 1960年代

1965年の土地利用をみると、まず海岸から納屋集落、水田、畑地、水田、集落・畑地、水田、集落・畑地、水田というように海岸線に平行した列状の土地利用が形成されていることが確認できる（第12図）。さらに、中里中においては島畑が分布していた。この頃は一つ一つの農地区画が小さく不整形であったため、生産性は低かったと考えられる。また、数は少ないが中里中と中里西においてビニルハウスが点在していた。これは試験的に取り入れられたものであると考えられる。また、中



第12図 1965年における白子町中里地区の土地利用  
 (1965年国土地理院撮影空中写真KT-65-5X・C3-20より作成)

里中において工場が立地していた。この時期、中里中では農業的性格の強い集落であったが、水産物や農産物の加工に関わる製造業もあったと考えられる。中里東では海岸沿いに多数の空地があり、これらの多くは干し場として利用されていた。また、海岸沿いの防風林には多くの小道が通っており、後に中里東にできる季節民宿から海岸へ出る際に便利であった。

## 2) 1970年代

1974年になると、1963年から実施された県営圃場整備事業によって、それまで小さく複雑に入り組んでいた農地は著しく整備、改善された(第13図)。これにともない道路網も整備された。とくに、中里地区の中央を横断し茂原市にいたる道路は、多くの海水浴客に利用され、数多くの季節民宿がそれに沿って軒を連ねた。また、中里中においてはビニルハウスが増加した。これらのハウスは、1965年のものと比べると設置面積が大きく、本格的な施設園芸が始まったことがわかる。中里東では集落内にクレーコートが2面設置されている。これは、この地区の先駆者がテニス民宿を試験的に始めたものである。またテニスコート用に整地中と考えられる空地が中里東の集落に隣接する農地にみられるが、これは後に中里地区のメインコートとなるものである。この「メインコート」とは、観戦用のスタンド席を設置した16面のテニスコートで、テニス大会の開催では主要コートとして使用されるようになり、以後は中里地区のテニス民宿において中心的な役割を果たすようになった。また、海岸沿いに九十九里有料道路が建設され、これが観光客を白子町にひきつけることとなった。しかし、その半面、中里東集落内にあった民宿から直接海に出ることが不可能となり、限られた出入り口まで迂回しなければならなくなった。また、数は少ないが干し場が残っていることもわかる。

## 3) 1980年代

1983年になると、中里東では多くの農地がクレーコートに転用された(第14図)。この地域はもともと農業振興地域であったが、様々な努力の

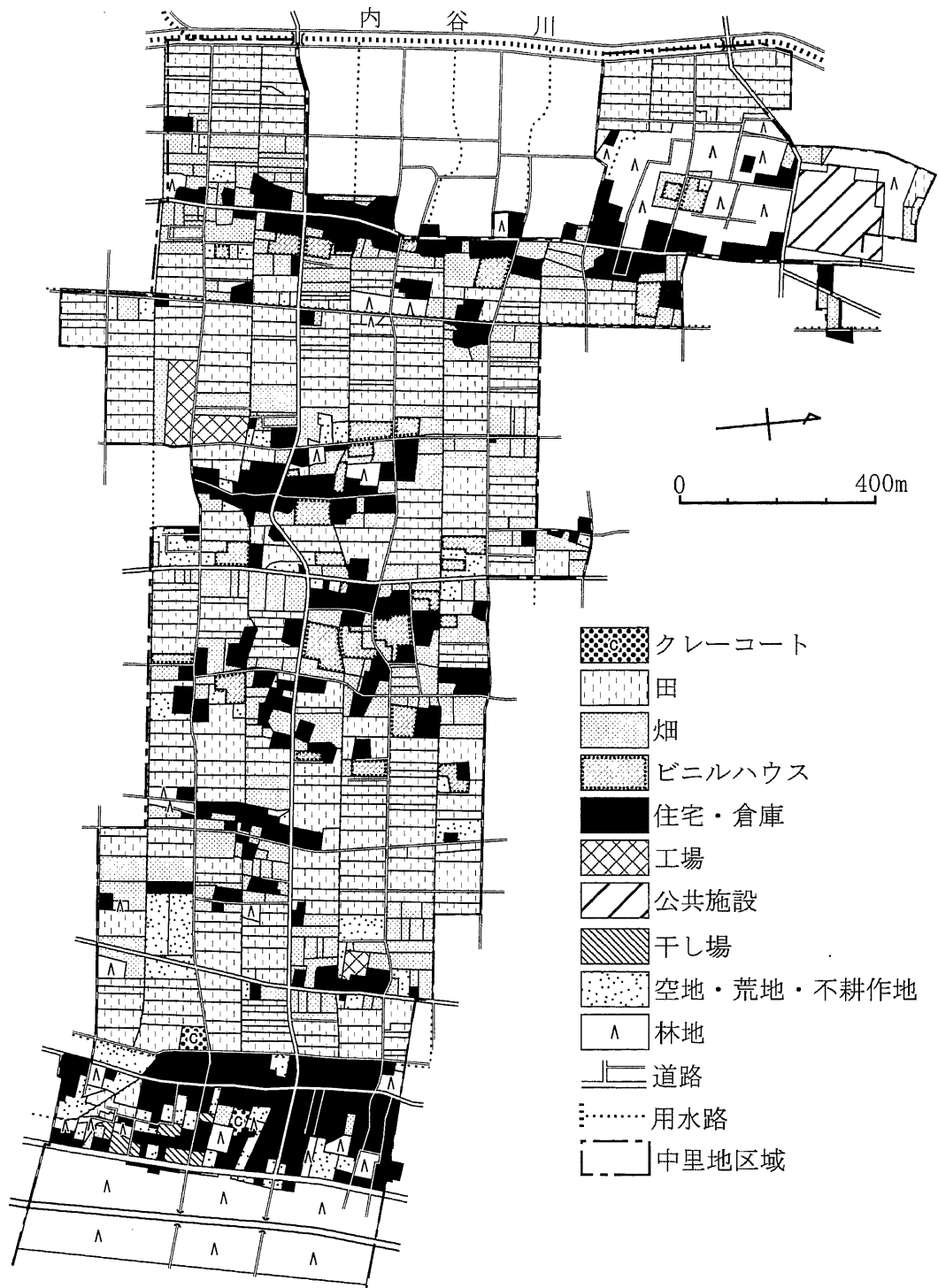
結果その地域から除外してもらうことができ、テニスコートに転換されていった。本来は農業用に整備された土地であったので転用は容易ではなかったが、土地区画整備事業によって整理された農地は、結果としてテニスコートへの転換には好都合であった。また、造成されたテニスコートはメインコートを中心にほぼ1か所にまとまっていた。これは、テニスコートを造成するために土地の交換分合が行われたためである。一方、海岸沿いの干し場は宅地やテニスコートに転用された。またこの頃、集落内にはテニス民宿のための白い鉄筋造の2～3階建ての建物が出現するが、それは1965年に見られた道路沿いの季節民宿の場所ではなく、テニスコートが多く立地する集落南部が多い。一方、中里西や中里中においては、宅地が増加し、住宅分譲用の空地も多い。園芸施設については1974年とほとんど変化していない。

## 4) 1990年代

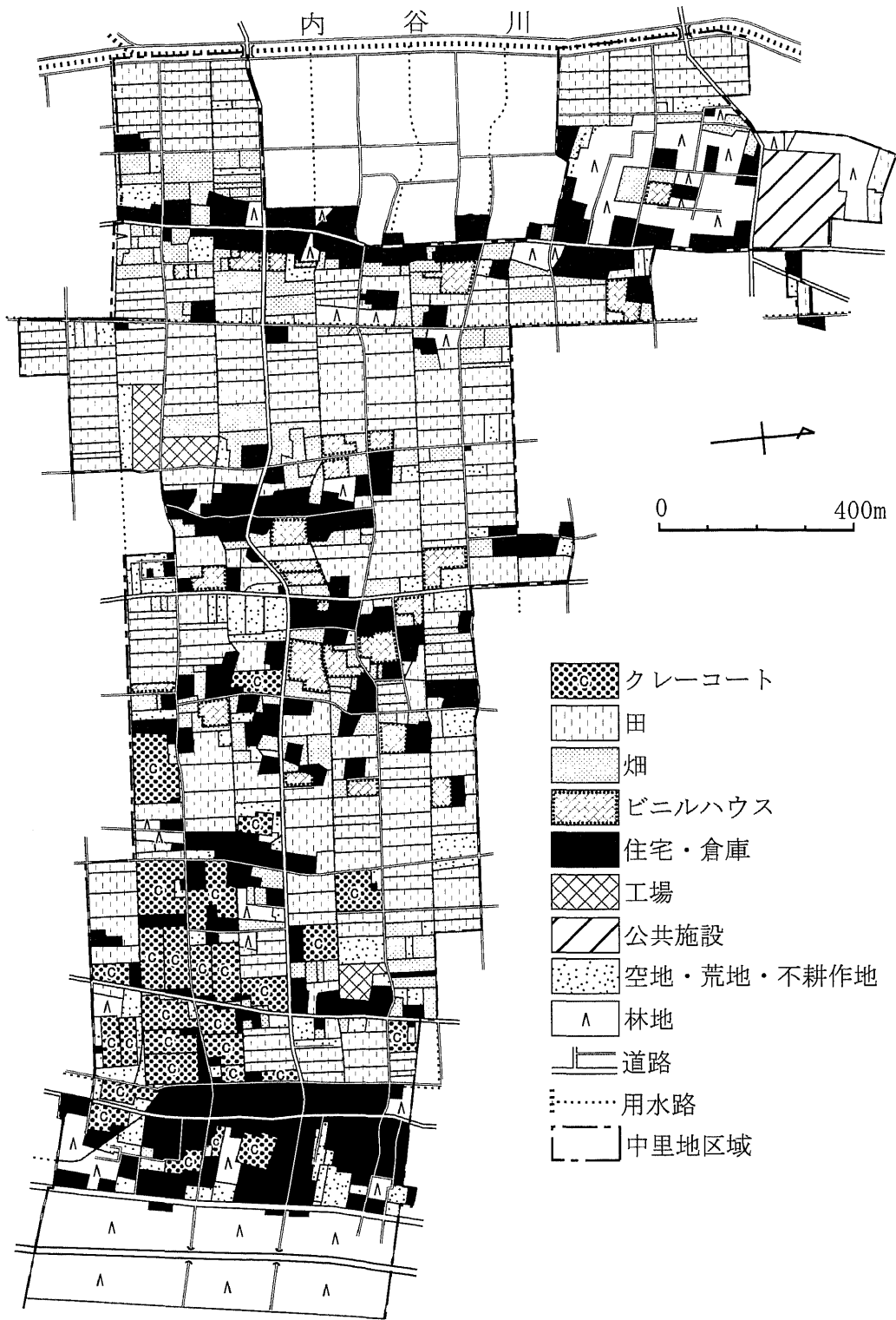
1995年の土地利用では、クレーコートからオムニコートに転換されたテニスコートが目立つ(第15図)。これらはメインコートの周辺や集落内の民宿に近い場所に位置する。一方、メインコートや集落から離れた場所では、そのままクレーコートとして利用されているものがほとんどである。そして、中里東の集落内部では、宿泊棟はより高層化し、白い鉄筋造の建築群が形成された。一方、中里中や中里西では園芸施設が増加したが、これは従来のビニルハウスに代って大型のガラスハウスが作られたためであり、大規模集約型の農業が始まったことがわかる。

### Ⅲ-3 中里地区における現在の土地利用と景観

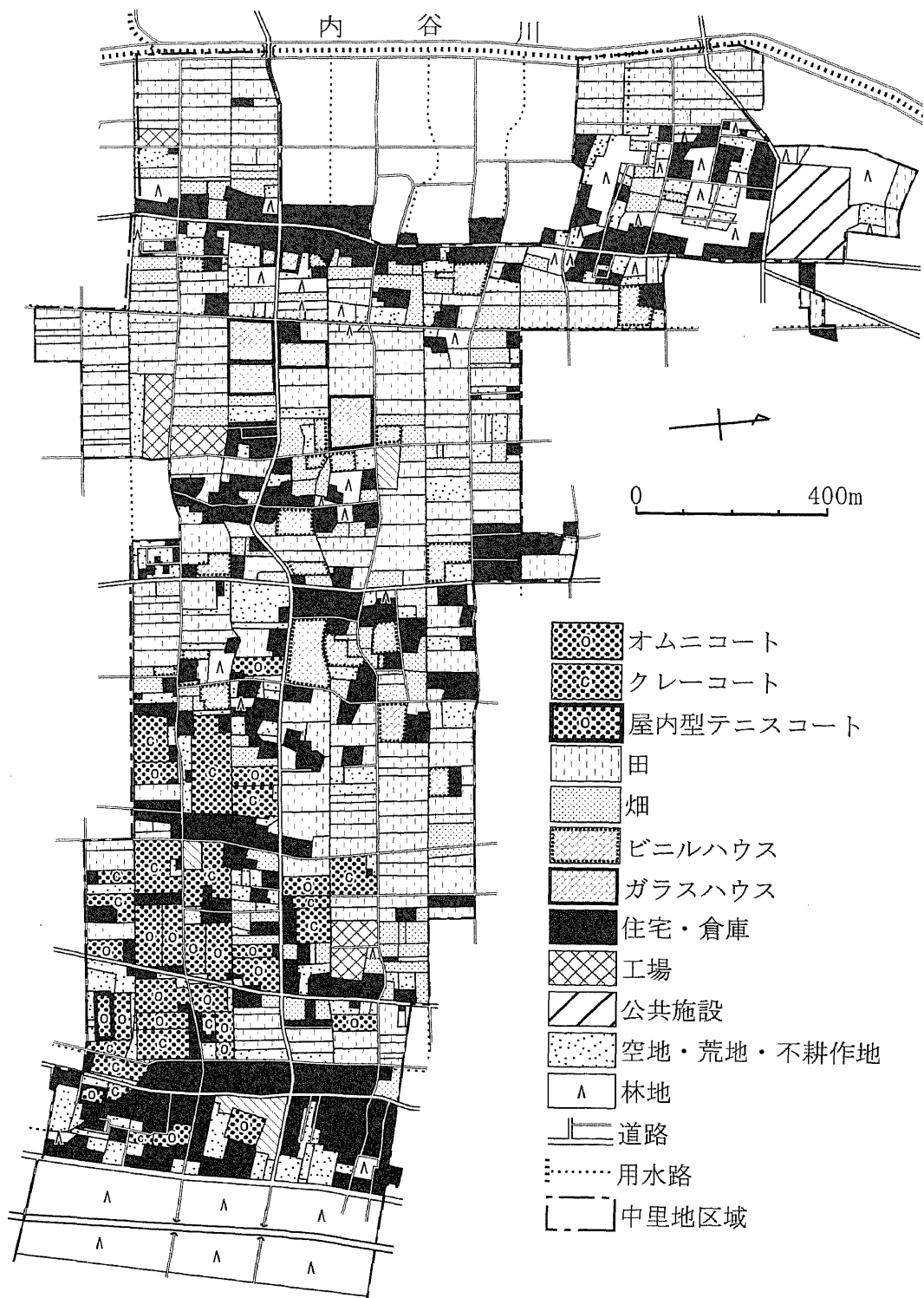
2004年10月に実施した土地利用調査によると、中里東では、集落やメインコートに比較的近く、改修されずに残されていたクレーコートの多くが、オムニコートに改修されている。その一方で、集落やメインコートから遠く離れたクレーコートのなかには、フットサル場やグラウンドゴルフ場などに転換されたものがある。また、多目的グラウンドなども建設されている。一方、メインコー



第13図 1974年における白子町中里地区の土地利用  
 (1974年国土地理院撮影空中写真CKT-74-13・C37-61, C37-63, C36-57より作成)



第14図 1983年における白子町中里地区の土地利用  
 (1983年国土地理院撮影空中写真CKT-83-2・C18-16, C18-18, C17-17より作成)



第15図 1995年における中里地区の土地利用  
 (1995年国土地理院撮影空中写真CKT-95-2X・C12-22より作成)

ト付近でもクレートコートが改修されずそのまま放置され、荒地と化している場所もある。集落内に設置されたハードコート駐車場として利用している箇所もあった。このように、たとえメインコートや民宿に近い場所でも、別の目的に転用されたり放置されることがあるようである。現在の中里地区を象徴する景観は緑色のオムニコートと民宿の白色の高層建築である。茂原市から白子町を望むと、オムニコートの緑に囲まれた、高層民宿群を見ることができる（写真1）。

テニスを楽しむ客はほぼ週末に限られ、ほとんどのコートには平日に利用者はいない。そのため、集落内には閉店したパチンコ店やコンビニエンスストアがあり、テニスショップも調査期間である10月の平日には営業しているものはなかった。営業していたのは、そば屋などの飲食店や衣料品店、小さな物産品店であった。なお、中里中や中里西では、九十九里地域に特有なマキで囲われた民家を見ることができた。

このように、中里地区では中里西と中里中にお



写真1 白子町中里地区における  
テニス民宿の景観

手前が人工芝を用いたオムニコートで奥がそれを所有するテニス民宿の建物である。緑色のオムニコートと民宿の白色の高層の建物が現在の中里地区を象徴する景観である。

(2005年5月 中村撮影)

いては現在も施設園芸農業を中心とした農業経営が行われ、農村集落としての一面を残している。一方で、中里東では水産業の衰退の後、1970年代後半からテニスを中心とした観光業に特化して発展を遂げた。さらに近年、グラウンドゴルフ場やサッカー場などのテニス以外の施設が増加するなど新たな動向がみられる。

#### IV 中里地区における観光地の成立と発展

##### IV-1 民宿開業以前の生業

1930年頃の白子町では、多くの世帯が半農半漁の生活を営んでいた。農業はこの地域の重要な産業であり、人々はおもに自家用として米や野菜、落花生などを栽培していた。そして、副業として農閑期を中心に11月中旬から7月上旬まで水産加工を行うのが、この地域の生活形態の特徴であった。

当時、この地域は干害の常習地帯だったため、農業の生産性は低かった。また、米価の変動も著しく、現金収入の不安定さが人々の生活を苦しめていた。そのため、副業として養蚕業を取り入れた農家もあった。このような厳しい状況であったにもかかわらず、民宿経営が盛んになるまで、農業がこの地域における主要な産業であった。そして、比較的広い農地を所有していた農家が多かったため、このことが後のテニスコート建設の基盤になったものと考えられる。

副業として行われていた水産加工では、九十九里浜で大量に獲れたイワシを丸干しやみりん干しなどに加工し、販売していた。とくに、中里東では水産加工を営む農家が多かった。1933年には漁獲高は2061トンを上回る程であったが、その4年後には漁獲高が3分の1にまで減少した<sup>35)</sup>。それ以降、徐々に漁獲高が減少していき、白子町における水産加工業も衰退していった。

##### IV-2 観光地の形成過程

白子町は、海水浴やテニスを目的とした観光客の増加と、それを支える民宿業とともに発展してきた。観光地化の重要な契機となったのは、海水



浴ブーム、テニスコートの導入、農業振興地域の解除、民宿経営の多様化などであり、それらに基づいて3つの発展段階に分けることができる(第2表)。

### 1) 季節民宿開業期

(1960年代後半～1970年代前半)

1960年代半ば頃の海水浴ブームの影響を受け、白子町の海水浴場を訪れる海水浴客は増え続けた。しかし、その当時白子町には宿泊施設が少なかった。そのような中、1965年に白子町の海岸沿

いに国民宿舎「白子荘」が開業したことで海水浴客が増加し、それに伴って民宿も増加していった<sup>36)</sup>。

白子町は、剃金、古所、五井、中里、幸治という5つの海水浴場を有し、海水浴客が多く訪れる場所である。それらの中でも剃金や古所といった南白亀川周辺の海水浴場が、最初に開場された。中里海水浴場は、それらに少し遅れて1964年に開場した。海水浴場ができたことで、海水浴客を中心とした観光客が増加し、1967年には中里海岸に

第2表 白子町の観光に関する略史

類型	年	白子町	テニス	温泉	民宿
季節 民宿 開業 期	1964	中里海水浴場開場			国民宿舎「白子荘」開業 4軒の民宿開業(S氏他)
	1965				
	1967	プール開設,4軒の海の家開業		町営温泉センター開業	
	1969	中里観光開発組合設立			
	1970	農業振興地域に指定 京葉有料道路開通			
	1971		中里地区にテニスコートが導入		
	1972	九十九里有料道路開通 東関東自動車道・成田まで開通	軽井沢への視察		
テニス 民宿 転換 期	1973		軽井沢への視察	人工砂風呂の建設	白子町貸家貸間民宿組合の設立
	1975	土地基盤整備事業	16面のテニスコート建設		
	1976	白子町総合開発			
	1977		全日本ジュニアソフトテニス大会開催		
	1979	農業振興地域解除			
	1982				白子町民宿組合設立
	1984		白子テニスフェスティバル開始		
経営の 多様 化 期	1988	海岸清掃開始			
	1989	白子グリーンファーム設立		白子温泉開発温泉旅館組合設立	
	1990		アポロコーストテニスクラブ設立	アクア健康センター設立	
	1993	ガーベラ団地の建設			白子町リゾートイン組合設立
	1994	チューリップ祭開始			
	1995	南白亀川イカダのぼり競争を開始			白子町民宿組合よりスポーツ振興ホテル組合が離脱
	2000	中里観光開発組合解散			
	2001	玉葱祭り開始			
2003	海の家組合が中里地区から白子町全体へ				
2005	全国高等学校総合体育大会				

(篠崎:1991, 白子町民宿組合資料, 聞き取り調査により作成)

プールも設置された。

白子町における最初の民宿は、1950年頃に南白亀川周辺に開業した4軒であった<sup>37)</sup>。中里地区においては、それから17年後の1967年に4軒の民宿と4軒の海の家が開業した。その後、海水浴客の増加とともに中里地区を中心に民宿は急増し、1974年には95軒に増加し、海の家も7軒になった。現在営業を行っている旅館や民宿の多くは、この時期に創業している。この当時の民宿は海水浴客を目的とした季節民宿であり、農業の傍らで宿泊業を営むところが多かった。また、民宿の多くは、主屋の一部を開放して海水浴客を泊めていた。当時の宿泊料は、1泊2食付きで700円から800円であった。主屋においては、定員以上の宿泊客が泊まり、雑魚寝するような事態も生じた。

## 2) テニス民宿転換期

### (1970年代後半～1990年代)

海水浴客が増加する一方で、民宿経営者たちは夏季以外の観光の可能性を模索していた。観光客の入り込み時期が夏季に偏っていたため、年間を通じて観光客を呼びこむためには、海水浴以外の観光対象が必要であった。

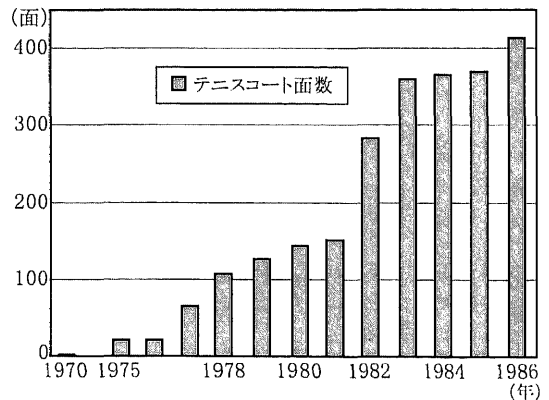
そのような中、民宿を営んでいたS氏が1971年に白子町で初めてテニスコートを建設し、それ以降徐々にテニス客が増え、1975年には中里地区に新たに16面のテニスコートがつくられた。

しかし、テニスコートの面数は十分ではなく、増加するテニス客に対応するためには新たなテニスコートを建設する必要があった。また、農地の多くは1970年に農業振興地域に指定されていたため、農地転用は容易ではなかった。しかし、テニスによる白子町の発展を見据えていたS氏ら地元の有志の働きかけにより、1979年に農業振興地域の部分的な解除が実現した。そして、これ以降多くの民宿が農地を転用してテニスコートを建設し、当時流行しつつあったテニスを観光対象の一つとして取り入れたことが、白子町が発展していく大きな契機となった。

白子町におけるテニスコート数の推移をみると(第16図)、1979年の農業振興地域の解除以降に急

激に増加した。とくに、1981年から1982年にかけてテニスコートの面数は、前年の2倍近くまで増加し、1986年には400面を越すまでになった。このように、白子町においてテニスが発展した背景には、海に面しているため冬でも霜がおりないという軽井沢や山中湖と違った温暖な気候という利点が挙げられる。1年中テニスコートが使用できるという特徴は、白子町がテニスによって発展した重要な要因であるといえる。そのため、テニスの春季合宿を行う大学生が白子町に集まり、2月中旬から4月中旬にかけてはテニス客であふれかえるほどの盛況ぶりであった。

また、白子町では年間30前後の大規模なテニス大会が開催されている(第3表)。大会の多くが夏季に集中し、そのうちの約半分の大会がソフトテニスの大会となっている。中でも、全日本ジュニアソフトテニス大会の参加者は5,800人にのぼり、白子町で開催される大会で最も参加人数の多い大会である。このように、多くの大会が開催されている背景には、学生に白子町を知ってもらおうと、積極的に大会の誘致活動を行ったことがあげられる。誘致活動には、テニス民宿経営に関する地域の指導者的立場でもあるM氏が積極的に取り組み、より多くの人にテニスの町というイメージをもってもらおうと、テニスメーカーや学校関



第16図 白子町におけるテニスコート面数の推移  
注：1971～1974年は資料欠損のためデータなし。  
(白子風土記編さん委員会(1989)により作成)

係者を呼んで視察をしてもらうなどの努力を重ねてきた。

また、おもにジュニアの大会やソフトテニスの大会を積極的に誘致していることも注目すべき点である。ソフトテニスの競技人口は中学生の年代が一番多く、今後のテニス市場を担うと予想される中学生に対して白子町の知名度を上げる貴重な機会である。これによって、今後再びテニス客として白子町に訪れる潜在的なリピーターを生むという点で、テニス大会の開催は白子町の将来の観光にとって重要なものであった。

一方、テニスが白子町における重要な観光対象となっていく過程で民宿数も増加し、1976年には104軒になった(第17図)。また、年々増加するテニス客に対応するため、民宿の多くはこの時期に季節営業から通年営業へと経営方法を変えた。それらの民宿は、テニスコートの建設や増設によって、テニス客を誘致しようとした。また、同時に宿泊施設の増改築などによって、さらに多くのテ

ニス客を獲得しようとした。しかし、このことが可能であった民宿は、もともと広い農地を所有していたものであり、それ以外は小規模な経営にとどまっていた。

また、当時テニスコートを備えた民宿は、「テニス民宿」と呼ばれるようになった。テニスコートを有する民宿は、通年経営にかわったことで宿泊室の稼働率が格段に上がり、収入も大幅に増加した。

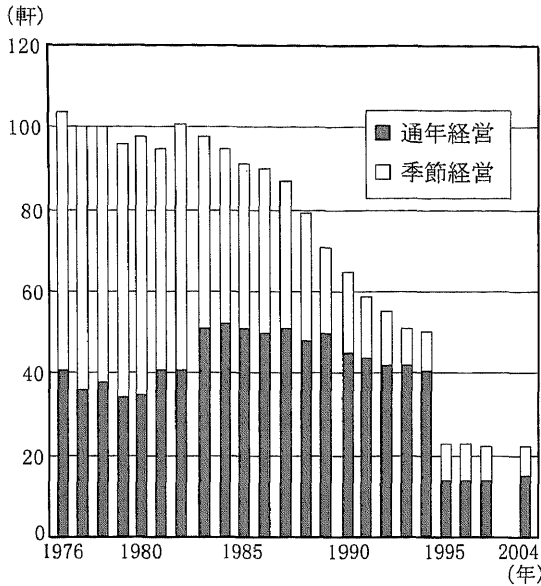
### 3) 経営の多様化期(1990年代～)

1989年に白子温泉が開発されたことにより、白子町には新たな観光対象が増え、民宿はさらなる観光客誘致へと動き出した。しかし、この時期から比較的経営規模の大きい民宿と経営規模の小さな民宿との収益性の差が生じ始めたと考えられる。なぜなら、温泉の導入、またそれに伴う温泉施設の増築には多大な費用が必要となるため、経営規模の小さい民宿は温泉を引くことが容易ではないためである。そのため、経営規模の大きい民

第3表 白子町におけるテニス大会一覧(2004年)

	大会名	種類	日程	前年の参加人数(人)
1	県選手権	ソフトテニス	4月29日	?
2	ヨネックス杯	ソフトテニス(中学生)	5月3日～5日	800
3	関東学生ソフトテニス春季リーグ	ソフトテニス	5月8日～12日	1,800
4	関東選手権大会	ソフトテニス	5月22・23日	800
5	関東高校選手権大会	ソフトテニス	6月4日～6日	?
6	医科歯科大リーグ	ソフトテニス	6月6日	700
7	白子テニスフェスティバル (社会人)		6月12・13日	1,600
8	高校総体県予選	ソフトテニス	6月19・20日	?
9	白子オープンインサマー		6月26日～7月3日	200
10	関東実業団リーグ	ソフトテニス	7月3・4日	160
11	SHIRAKO99テニストーナメント		7月19・20日	150
12	関東ジュニアテニス選手権		7月21日～27日	?
13	関東信越地区高等専門学校総合体育大会	テニス	7月22・23日	180
14	フェスタ全日本学生庭球同好会連盟		7月27日～31日	600
15	全日本学生選手権	ソフトテニス	8月8日～13日	1,500
16	全日本ジュニアソフトテニス大会	ソフトテニス(中学生)	8月16日～19日	5,800
17	全日本学生オープンソフトテニス選手権	ソフトテニス	8月22日～24日	1,400
18	風戸杯		8月25・26日	400
19	千葉県市役所職員体育大会	テニス	8月30・31日	300
20	全日本社会人選手権	ソフトテニス	9月4・5日	?
21	アポロカップチームテニストーナメント		9月18・19日	800
22	県民体育大会	ソフトテニス	9月25・26日	?
23	全日本市町村職員ソフトテニス大会	ソフトテニス	10月2・3日	450
24	白子カップ	ソフトテニス・テニス	11月13・14日	2,000
25	SHIRAKO99テニストーナメント		11月20・21日	200
26	白子オープンインウィンター		12月4日～11日	300
27	カワサキ杯東日本ジュニア		12月27日～29日	5,500

(聞き取り調査により作成)



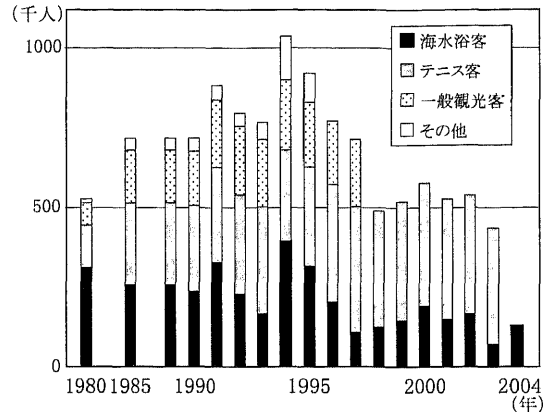
第17図 白子町における民宿数の変遷

注1：1998～2003年は資料欠損のためデータなし。  
 注2：1995年に白子町民宿組合からスポーツ振興ホテル組合が離脱したため、民宿数が大幅に減少。  
 (白子町民宿組合資料により作成)

宿は、温泉という新たな集客対象を取り入れ、その経営規模をさらに拡大させていくのと対照的に、規模の小さい民宿は、引き続き海水浴客や一般観光客を相手とした経営を行わざるをえなかった。その結果、廃業してしまう民宿も現れるようになった(第17図)。

1994年には観光客数が105万人となり、約53万人の観光客数であった1980年のおよそ2倍まで増加し、白子町は観光のピークを迎えた。しかし、1997年には約78万人に減少し、とくに海水浴客の減少が目立つようになった。第18図は、白子町における目的別観光客数の推移を示したものである。1980年には、観光客の60%を海水浴客が占め、テニス客は25%であった。しかし、海水浴客は徐々に減少していき、1997年には約10万人に減少した。近年では、再び海水浴客が増加しているが、15万人前後と最盛期の約半分程度にとどまっている。

その一方で、白子町におけるテニス客数は、テニスブームの影響などにより着実に伸び、1997年



第18図 白子町における目的別観光客数の推移

注1：1981～1984年、1986～1988年は資料欠損のためデータなし。  
 注2：1998～2004年の一般観光客数およびその他、2004年のテニス客数は不明。  
 (白子町第3次総合計画および白子町商工観光課資料より作成)

には40万人に達した。しかし、バブル経済の崩壊の影響や若者の余暇志向の変化などにより、週末のテニス客が大幅に減ったことから、その数は減少傾向にある。そのため、これまでテニス客を主な客層として迎え入れていた民宿は、苦しい経営を迫られるようになった。とくに平日の稼働率を高めることが重要な課題となった。

そのような中、2000年頃から高齢者を中心に人気が高まっているグラウンドゴルフが、白子町の新たな観光対象として注目されるようになった。グラウンドゴルフは、町営の多目的グラウンドや民宿が建設したグラウンドゴルフ場、オムニコートなどで行われているが、平日はほとんど予約で埋まり、1か月前から予約しなければならないほどの盛況ぶりである(写真2)。

一部の民宿では、温泉とグラウンドゴルフの両方を楽しむことができる1泊4食の「シルバープラン」を新たに作り、高齢者の誘致に力を入れ始めた。また、マイクロバスによる無料送迎なども

行っている。加えて、町営の多目的グラウンドを利用してサッカーやフットサルなどの合宿や、体育館を利用した室内競技の合宿なども行われるようになり、白子町において新たなスポーツ観光が誕生しつつある。

このように、テニス以外のスポーツ観光も行うことで、民宿は新たな客層の獲得や平日の稼動が可能になった。しかし、今までどおり海水浴客やテニス客のみを受け入れる民宿などもあり、経営がますます多様化するようになった。

### Ⅳ-3 現在の観光形態

2003年における白子町の観光客数は、テニス客が37万人、海水浴客が12万人、温泉利用者数は17万人となっており、依然としてテニスが重要な観光対象となっている。その一方で、春は学生テニス、夏は海水浴や学生の夏合宿、冬は宴会、そして平日のグラウンドゴルフなど、季節によって主な観光形態や観光客数は異なっている。

白子町商工会の資料によると、2000年9月から2002年8月における白子町における民宿宿泊者の発地は、28.4%が千葉県、21.6%が東京都、20.4%



写真2 白子町中里地区におけるテニスコートでグラウンドゴルフを楽しむ高齢者グループ

オムニのテニスコートでは旗やゲートなど器具を準備するだけで、グラウンドゴルフやゲートボールを楽しむことができる。このほかに中里地区では、日本グラウンドゴルフ協会認定の16の専用グラウンドもある。

(2005年5月 中村撮影)

が埼玉県であり、千葉県と近隣の都県で70%以上を占めている。そして、同じ関東県内でも神奈川県は10.9%、茨城県は3.6%、栃木県は2.7%、群馬県は1.8%と低く、白子町における集客圏は関東の中でも千葉県内および東京都、埼玉県が中心であるといえる。また、北は北海道、南は鹿児島県からの観光客も少数ながら存在している。

宿泊数に関しては86%の観光客が1泊、12%が2泊であり、ほとんどの観光客が1泊のみの滞在であった。また、宿泊者の多くは8月に宿泊しており、これが全体の49%を占めていた。とくに盆前後の宿泊が多く、夏季休暇を利用した家族旅行などが多い。一方、7月の宿泊者は11%と低く、5月の宿泊者も全体の14%を占めていた。とくに5月は連休中の宿泊者が多い。

また、近年の白子町における新たな観光として、観光地引網やチューリップ祭、たまねぎ祭、南白亀川イカダのほり競争があげられる。観光地引網は、地引網発祥の地である白子町でかつて盛んに行われていた漁法を観光客に体験してもらおう、という試みである。また、チューリップ祭、たまねぎ祭、南白亀川イカダのほり競争などは、元来住民同士のコミュニケーションを図るための催しであった。しかし、近年周辺地域からの参加者が徐々に増えている。その中でも1996年に開始された南白亀川イカダのほり競争は、白子町の町おこしに貢献したといわれ、翌年には毎日新聞社主催の「毎日・地方自治大賞」で表彰を受けている。これまで、白子町は、海水浴、テニス、グラウンドゴルフというように、スポーツによってその発展を遂げてきた。しかし、近年その傾向は変わりつつある。白子町の地域資源を生かした、スポーツではない新しい観光資源も誕生しつつある。

## V 類型別にみた現在の経営形態の相違

### V-1 民宿の類型化

白子町における民宿の特徴を明らかにするために、聞き取り調査を実施した29軒を労働力、所有施設の種類・規模およびそれらの利用形態によって類型化した。この結果、「大規模複合型」、「テ

ニス特化型」,「スポーツ複合型」および「既存民宿型」の4つに分けた(第19図)。以下では,類型別に2005年における宿泊業経営の内容を検討していく。

「大規模複合型」には9つの民宿が含まれる<sup>38)</sup>。本類型は平均収容人数が247人であり宿泊施設の規模が類型中最大である。また,平均所有コート数は,26.3面である。9つの民宿が所有するテニスコートは210面で,白子町内のコートの半分以上を占めることとなる。これらのコートのうち188面がオムニコートであり,白子町全体のその4分の3にあたる。また,すべてが温泉施設を所有し,白子町温泉組合の中核的な構成員である。

この類型の特徴は規模を活かした経営を行っていることである。大規模な施設を有するということは,それを維持し利益を生むために客室の稼働率を最大化し,なるべく多くの集客を行わなければならない。そこで,宿泊施設にエレベーターが設置されていることを活かし,高齢者層を顧客として獲得する試みがなされている。そのサービスの1つがグラウンドゴルフツアーである。この場合,オムニコートはグラウンドゴルフ場として活用され,9つの民宿のうち3つは,グラウンドゴルフ場,ゲートボール場などの施設を設けている。その他,テニス団体の送迎に利用しているバスで,周辺の観光地をめぐるツアーを行い,スポーツ団体の食事とは異なる料理を提供し,中には劇場を用意するものもある。これらのサービスに加え,露天風呂を設置するなど,温泉を集客に役立てている。これらの経営努力により,平日に余暇時間をもつ高齢者層を取り込み,閑散期の集客力の向上が図られている。従って,この類型に属する民宿では常勤の労働力を他の類型より多く雇用し,企業的な経営を行っている。

「スポーツ複合型」には,11の民宿が含まれる。この類型は,平均収容人数が163人と「大規模複合型」と比較すると宿泊施設はやや小規模である。また,この類型もテニスコートを有しているが,平均所有面積が11面と大規模複合型のおよそ半分である。オムニコートについては,その平均所有

面数は4.7面とさらに少ない。

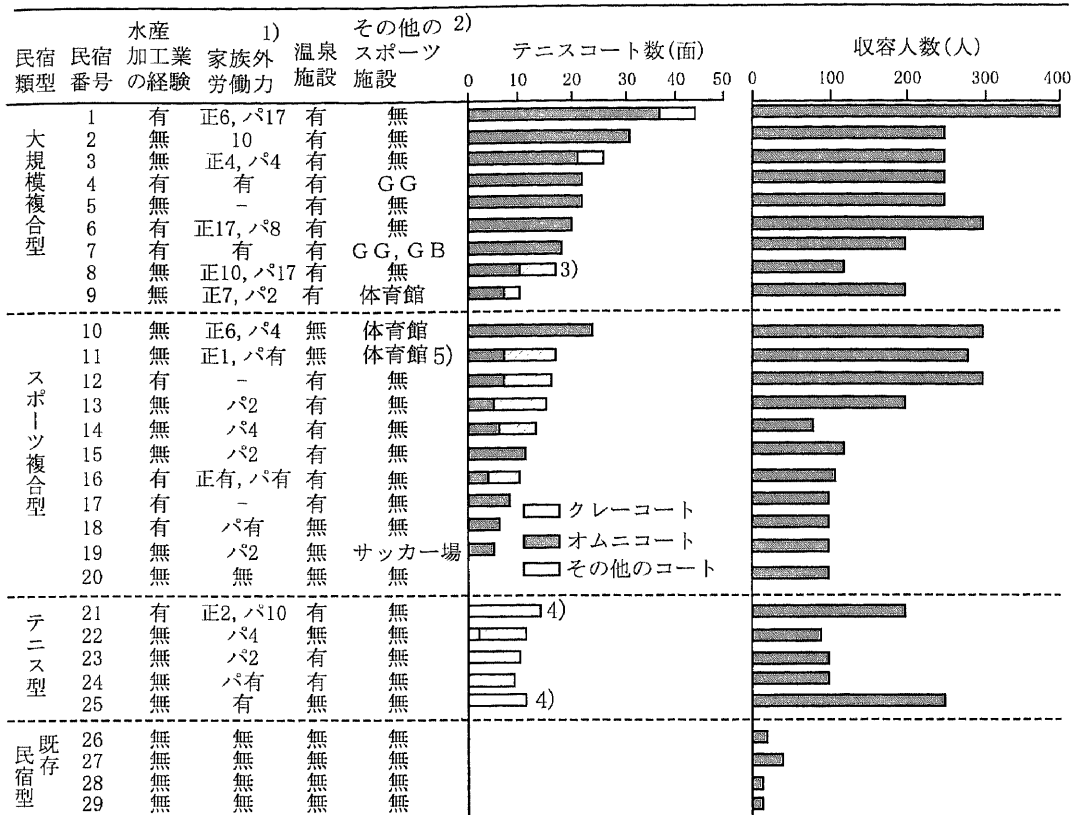
この類型の経営の特徴は,テニス以外のスポーツによる集客である。本類型の民宿の宿泊施設は,エレベーターを備えていない。そのため,高齢者の宿泊には便が悪い。そこで,これらの民宿は学生や社会人の各種スポーツ団体を宿泊させ,テニス以外であってもその設備を斡旋する。中には,自ら体育館やサッカー場などの大規模なスポーツ施設を所有し集客力を向上させるものもある。

「テニス型」は,5つの民宿から構成されている。宿泊施設の規模については平均収容人数が148人,平均所有コート数は11面といずれも「スポーツ複合型」と同程度である。しかし,本類型にはオムニコート,その他のスポーツ施設を所有しているものはない。従業員は多くは,パートタイムである。

この類型の経営の特徴は,おもにテニスにより集客していることにある。すなわち,顧客はおもにテニス団体客であり,そのためその他の施設を必要としない。これにより,繁忙期にのみ,一時的な雇用による従業員を必要とするのである。このように,必要最低限の小規模な施設で運営の費用を抑え,テニス客を中心とした経営を行っている。

「既存民宿型」に分類したのは,4つの民宿である。平均収容人数が22人と4つの類型中最小である。さらに,1部屋あたりの収容人数に注目すると,前述の3類型が,それぞれ5.9人,6.1人,6.5人である一方,本類型は3.1人とおよそ半分の規模である。またこの類型にはスポーツ施設を持つものではなく,温泉施設も有していない。

本類型の基本的な経営形態は,1960年代に成立した夏季の海水浴客の宿泊所としての機能を有するものである。しかし,近接するほかの類型のコートの利用者が宿泊することもある。顧客は,上記の類型のようなスポーツ団体でなく,家族づれの海水浴客などの小規模のグループが主である。そのため,宿泊施設全体が小規模であり,1部屋あたりの収容人数も少人数で経営が可能である。また,この小規模性による細やかなサービスを活か



第19図 白子町における民宿の経営形態 (2005年)

- 「正」は正社員, 「パ」はパートタイムおよびアルバイト人員, 「-」は不明を指す。
- 「GG」はグラウンドゴルフ場, 「GB」はゲートボール場を指す。
- クレールコートは2005年現在は使用されていない。
- 現在の経営者は民宿番号7。
- 2006年設置予定。

(聞き取り調査により作成)

し、夏季以外においても、飲食店の経営や勤めなどの生業を営みながら、民宿の営業を行うものもある。このように、維持費用の少ない小規模な施設で、その特徴を活かし、副次的な生業と組み合わせた経営を行っている。

## V-2 施設の変遷とテニスコートの立地

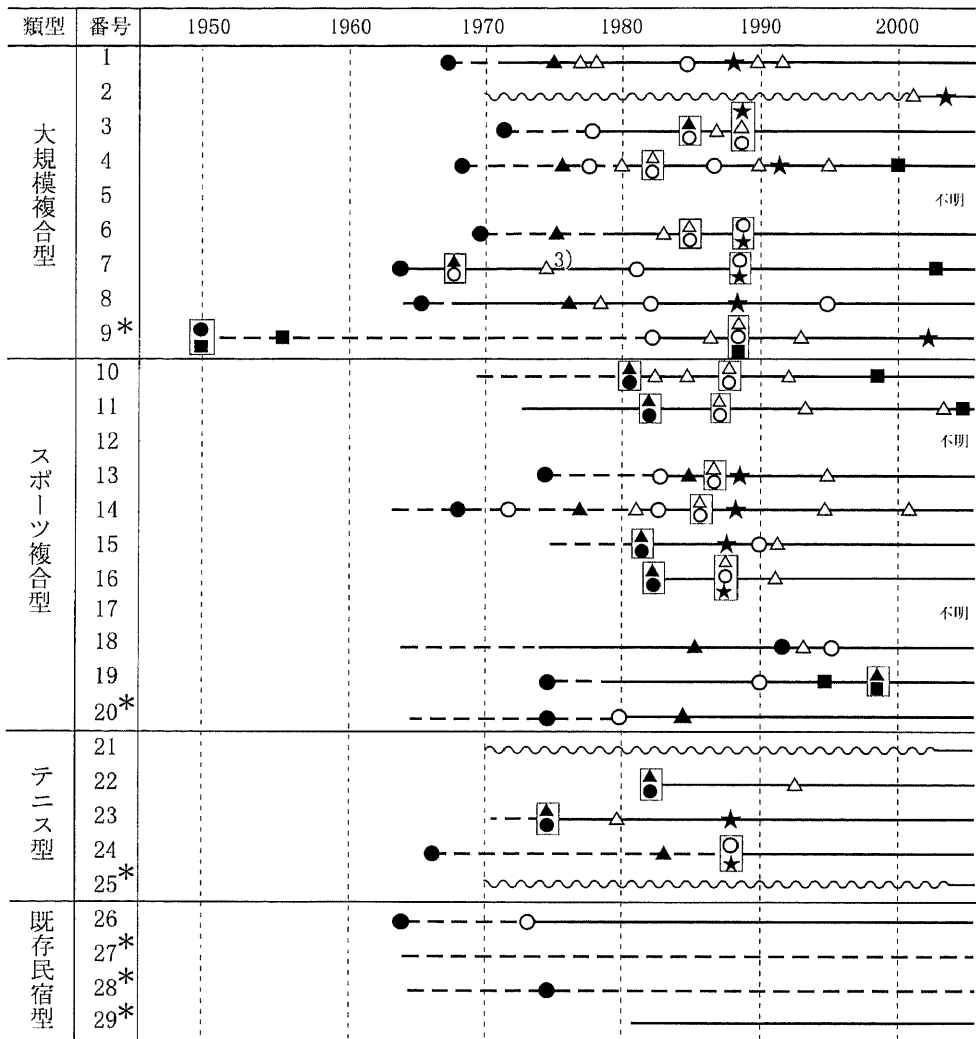
第20図は、中里地区における民宿の個別の経営変遷を類型別にまとめたものである。これによると、1967年に最初の4軒が民宿を創業してから5年以内のほぼ同時期に、すべての民宿が季節民宿として開業しており、中里地区では民宿経営が短時間で普及したことが分かる。既存民宿型やス

ポーツ複合型、テニス型にみられるように、季節民宿の場合、開業当時は主屋の一部を客室とすることが一般的であるが、大規模複合型は当初から主屋とは別に宿泊施設を建てている。大規模複合型に次いで、テニス型、既存民宿型は、テニス客が増加する1980年頃までにはほぼすべての民宿が専用の宿泊施設を建てている。この頃の宿泊棟は、10室未満の木造2階建て造りが中心で、何軒かはその後建築された新しい宿泊棟と渡り廊下で結んだ形態であり、現在も利用されている(写真3)。一方、スポーツ複合型の宿泊施設の建設は遅く、1980年代以降のテニス客の増加に合わせたコートの設置と同時に宿泊規模を拡大した。大規模複合

型をみると、多くは宿泊専用施設をこの時期から中規模で鉄筋の宿泊棟に建てかえ、現在でも旧館として使用されている。収容人数はそれまでの民宿経営の場合の2倍となった。

テニスコートについてみると、1975年に大規模複合型の中で2軒が最初に設置した後は、大規模

複合型の中でコートが導入が進み、1980年までにこの類型の大半がコートを設置した。スポーツ民宿型とテニス型は、テニス客が増加した1980年以降にコートの新設した。一方で、同時期の大規模複合型は、すでにテニスコートを増設し、一部ではクレールコートからオムニコートへの改築を始め



——: 通年経営    - - - : 季節経営    ★: 温泉の導入    ●: 宿泊施設の新設    ○: 宿泊施設の増改築  
▲: テニスコートの新設    △: テニスコートの増設    ■: その他のスポーツ施設

第20図 白子町における民宿の経営変遷

- 1) 民宿の番号は第19図と対応。
- 2) 波線は現在の経営者と異なっているため詳細が不明であることを示す。
- 3) 1974年以降におけるテニスコートの増設については不明。
- 4) 民宿番号に\*印が付いている事例は、宿泊施設が中里地区以外に立地している。

(聞き取り調査より作成)





写真3 白子町中里地区における民宿の新館と旧館

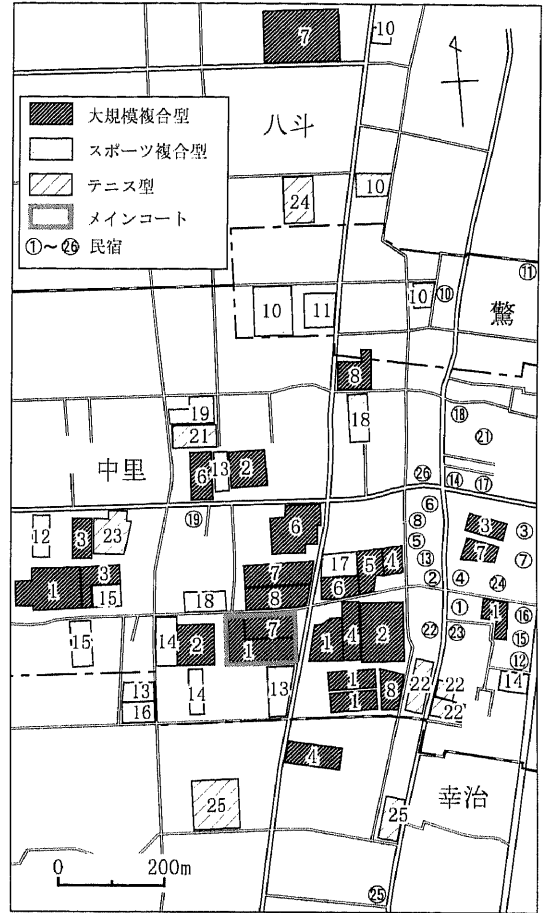
右側は1980年代に最初に建てられた宿泊棟で、左手側がバブル経済期に建てられた新館の宿泊棟である。両棟は渡り廊下でつながっている。現在は主に新館を利用しており、旧館は団体客の貸切用に使用することもある。

(2005年5月 星撮影)

ており、テニスコートについて常に先導的な役割を果たしてきたことが読みとれる。このテニスコートの導入以降、既存の民宿型とテニスを中心に民宿経営を行う他の類型のその性格は異なったものになった。

1975年から2005年に至るまで、大規模複合型やスポーツ複合型は平均して2～3回のコートの増改築を繰り返し、徐々に客室の稼働率を上げてきた。このような動きは、とくに1985年から1991年のバブル経済期に集中しており、コートの増設とともに宿泊棟の増改築も盛んに行われた。テニス型は、上記の類型とは異なりコートの増設をほとんど行わず、設置当初と同じ面数で、なおかつ旧式のクレーコートで現在も経営している。

このように、類型によってコートの増設の程度に大きな差が生じた一因として、既存のテニスコートの立地場所が指摘できる(第21図)。先述のように、テニスコートを最初に導入したのは大規模複合型であった。導入当初は、交換分合により農地を1か所にまとめ、そこにテニスコートをつくった。最初に設置された16面のメインコート周辺から順を追って農地が転用されていった。そのため、大会会場となるメインコートからホテルが立ち並ぶ通りまで大規模複合型のテニスコート



第21図 白子町中里地区周辺における民宿およびスポーツ施設の分布

注1：民宿の番号は第19図の民宿番号に一致。

注2：コートの番号は民宿のそれに一致。

(聞き取り調査および各民宿資料により作成)

が集中している。この付近のコートは宿泊施設から近く、テニス客にとって利便性が高く、頻繁に利用されるようになった。さらに、大規模な大会が誘致されるようになると、コートの利用率が上昇していった。他方、後発的であったスポーツ複合型とテニス型のコートは、大規模複合型のコートを取り囲むように周辺に細かく分散して立地している。とくにテニス型のコートは、メインコートからも民宿街からも離れていることが多い。このような遠隔地のコートは、旧式のクレーコートが大半を占めている。立地条件の悪さに伴い、コートへの設備投資についてもさらに遅れをとる形と

なったといえる。

テニスコートの設置と異なり、1989年に開発された温泉は、地区内の給湯用パイプラインの建設が一斉に行われたため、各民宿への導入時期に差はほとんど無い。しかし、導入した民宿は大規模複合型とスポーツ複合型にはほぼ限られている。これは第1に、源泉からの距離によって施設導入費に大きな差が生じたためである。民宿群の南西側に位置する源泉から伸びたパイプラインは、町道101号線までしか伸びておらず、それ以北の民宿は自費で延長するか、または給湯タンク車で運ばなければならない。第2に、温泉の導入の際に、入浴場の改装のみならず、宿泊施設全体の増改築への投資も必要であった。そのため、同じ民宿群に位置しながらも、温泉導入以前からテニスコートの増設を図り、経営の規模を拡大して集客力を上げてきた大規模複合型とスポーツ複合型の多くがさらなる投資を行うことができたとみられる。これ以降、温泉施設の導入や宿泊施設の拡大がさほどみられなかったテニス型は、既存の施設を活かし、よりテニスに特化した経営類型へと移行した。

大規模複合型と一部のスポーツ複合型は、宿泊棟について、現在に至るまで平均して約3回の改装を行っている。これらの民宿は、1980年代前半に建てた鉄筋の中規模の旧館とバブル経済期に建てた温泉施設付きの新館をともに利用している(写真4)。このバブル経済期に建てられた新館は、従来の建物より大規模で、なおかつ高層化した鉄筋のリゾートホテル形式のものが多く、とくに大規模複合型に多くみられるのは、温泉導入に伴う新館建設を機に、和風旅館や南国のリゾートホテルのように内装の趣を変え、それまでのイメージを改めている点である。テニスを中心としたスポーツ客のみならず、一般観光客を取り込む複合的な観光民宿への転換が図られた。これは、2000年頃からテニスコートを平日客用のグラウンドゴルフ場へと転用する動きにもみとれる。一方、スポーツ複合型は、テニスコートに加えサッカー場や体育館など施設を複合化しつつも、大規模複

合型とは異なり、スポーツ客の誘引に的を絞った経営へと移り変わりつつあるといえる。

次に、これまで述べた経営類型の事例を示し、それらの経営の特性について検討する。

### V-3 類型別にみた経営事例

#### 1) 大規模複合型の事例 (A 民宿)

A 民宿は、2005年現在、53の客室を有する鉄筋8階建ての宿泊施設をもち、300人の宿泊客の受け入れが可能である。1989年に完成した現在の宿泊棟には、屋内外の温泉施設を2箇所設置し、日帰り入浴客も受け入れている。主な労働力は、世帯主夫婦とその母の3人と従業員17人の計20人であり、この他に繁忙期には、パートやアルバイトを8人雇うこともある。コートはすべてオムニコートで、20面設置している。

A 民宿は、1970年に季節民宿として開業した。開業当時、中里地区では幾つかの民宿がすでに営業を始めており、A 民宿は民宿番号7の先々代の勧めがきっかけとなり民宿を始めたという。主屋



写真4 白子町中里地区における大規模複合型民宿の宿泊施設

手前側の4階建ての棟と奥の8階建ての棟を渡り廊下で結んだ複合宿泊施設である。奥の宿泊棟の1階には露天風呂、最上階には展望風呂を有する。駐車場にはフェニックスが植えられリゾートホテルのような趣を醸し出している。

(2005年5月 小島撮影)

とは別に、6部屋の客室と15畳の大広間をもつ木造2階建ての民宿を建て、家族労働を中心に、夏の繁忙期のみ、臨時の女性パート6人を加えた計9人によって経営していた。開業当時は夏季の海水浴客の宿泊が中心であったが、徐々に増加しつつあったテニス客も受け入れるようになり、1976年には水産加工場の跡地に2面のハードコートを設置した。コートの設置後は、社会人テニス部の予約が入るようになり、同年さらに2面増設した。社会人テニス部の宿泊はおもに週末や、祝日が中心であった。A民宿は、週末の社会人のみならず、2月、3月の大学生のテニス合宿や、年末年始の宴会客を受け入れられるように、1980年頃に民宿を通年営業に変えた。また1983年頃にはテニスコートをさらに10面新設し、水産加工業と農業を中止して本格的なテニス民宿へと経営転換した。中里地区内でテニス大会が誘致されるようになると、A民宿は1985年に宿泊室7部屋と30畳の大広間をもつ鉄筋コンクリート2階建ての宿泊棟を増築し、さらにテニスコートを6面新設して、大会に伴う大団体客にも対応できるようにした。1989年に現在の宿泊棟が完成した際には、民宿からホテルに改名し、内装の趣をリゾートホテルのように変え、イメージを一新した。

しかし、1990年代のバブル経済崩壊以降、急激にテニス客は減少した。とくに、客単価の高かった社会人テニス客の週末の利用が少なくなり、コートを利用する客は、大学生や中高生などテニス合宿が中心になった。そのため、学校の休暇期間である春季と夏季にテニス客が集中するようになった。この時期からA民宿では、テニス合宿期間以外の利用客、とくに平日を対象とした集客を模索するようになった。

当時、平日を利用する客層はゲートボールを目的とした高齢者が中心であった<sup>39)</sup>。A民宿では、平日限定の宿泊プランを企画したところ、ゲートボール愛好者に限らず、老人会やスポーツクラブなど高齢者主体の団体客を獲得することができるようになった。2002年以降は、グラウンドゴルフの利用客が増加したため、町営の多目的グラウン

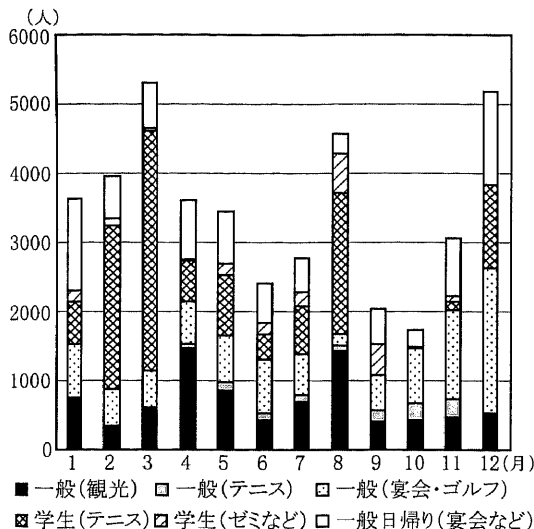
ドや野球場、茂原市内のグラウンドをA民宿側が手配し、バスでの送迎を含めた1泊4食のプランで販売するようになった。また、平日にも観光客を呼び込むために、バスで観光地を周遊する観光プランを始めた。これは出発地まで迎えに行き、成田山や佐原の町並みなど千葉県内の観光地を經由して民宿まで送るといったプランで、春や夏の行楽シーズンの集客を増大させた。

第22図は、A民宿の月別、目的別利用者の推移を示したものである。2月、3月の大学生のテニス合宿の時期、および8月のジュニアテニス大会の時期が最も利用者が多い。このテニス客は全体の35%を占めるなど、A民宿にとって依然としてテニス客が最も重要な顧客であることがわかる。8月の海水浴客、12月の宴会客など、民宿経営時代からの固定客を確保しつつ一方で、毎月一定数の入込があるグラウンドゴルフ客や一般観光客が増加しつつある。グラウンドゴルフ客は全体の20%を占め、テニスについて重要な顧客となりつつある。A民宿では全体の53%がスポーツ利用客であるが、現在では観光客や日帰り客など一般客は37%占めるようになり、観光プランの企画や温泉設備への投資の成果が出始めている。

このように、A民宿は、従来の海水浴客、テニス客に加え、平日にグラウンドゴルフやゲートボールを利用する高齢者層、さらには温泉や観光見物を目的とした一般客など、利用時期、利用目的を組み合わせる客を受け入れ複合的に経営を行うようになった。A民宿の現在の経営主は、千葉県のホテル組合に参加して温泉観光地の視察に行ったり、あらたにパークゴルフの研修会に参加したりするなど、今後もテニスを中心に据えつつ積極的に多角化を図ろうとしている。

## 2) スポーツ複合型の事例(B民宿)

B民宿は、2005年現在、250人を収容できる7階建ての宿泊施設内に42の部屋、117畳の大広間、200席の会議室、大浴場などを有している。さらに、24面のオムニコート、体育館などのスポーツ施設をもつ。家族労働力3人に加え、正社員6人、パー



第22図 A 民宿における宿泊者数の月別推移 (2003年)

(聞き取り調査により作成)

ト4人および夏季の学生アルバイトという雇用労働力で運営されている。

B 民宿は、現経営者の先々代が1970年に20部屋、収容人数100人の木造平屋の建物を建設し、夏季のみの季節民宿として開業した。そして、1973年に現経営者の父が経営を継ぎ、1981年に宿泊棟を15部屋、収容人数150人の鉄筋2階建てに改め、クレーコート5面を造成し、通年営業のテニス民宿へと移行した。そして、1982年にクレーコート3面を、1985年にクレーコート10面をそれぞれ造成した。さらに、1988年になるとこれまでに造成した合計18面をオムニコートに改装し、加えてクレーコート7面を造成した。また、42部屋、収容人数250人の建物を新設し、送迎用のバスも導入した。そして、1992年には最後に造成したクレーコート7面をオムニコートに改装した。1999年に現経営者が経営を継ぐと、民宿の近くのテニスコート3面のあった場所に体育館を建設した。

このように、宿泊施設とスポーツ施設の拡充を経て、現在、スポーツ客とスポーツ以外の客数は8：2の割合となった。スポーツ客は、春季と夏季の学生テニス合宿客、週末の一般のテニス客、春季と夏季の学生合宿客、および卓球などのス

ポーツを目的とする高齢客であり、テニスコート利用客と体育館利用客の割合は7：3である。利用者は、体育館で卓球のほかにバスケットボールやバレーボールなどを楽しんでいる。

2000年以降は、卓球などのスポーツを目的としてポスターを作製し、年2回の卓球大会の開催、および高齢者向けの1泊4食の宿泊プランの企画などを行っている。彼らは、体育館利用客の1割程度に満たないが、リピーター率がテニス合宿客の7割に対し、高齢者は9割と高く、これがこの客層の獲得に注力する理由である。

このようにB 民宿では、現在は人数の多いテニス客を基盤として、それ以外のスポーツ客や数は少ないが高齢者層を積極的に受け入れようとしている。この点では、多様な集客層をもつ前記の類型「大規模複合型」に類似していく傾向があるといえる。

#### スポーツ複合型の事例 (C 民宿)

C 民宿は、1975年に収容人数40人の木造平屋の宿泊施設を建設し、夏季のみの季節民宿として開業した。この創業時期は、周辺の季節民宿よりも若干遅い。C 民宿は当初から通年営業の許可を取り、テニス民宿として開業しようとしたものの、テニスコート造成の許可がおりず、やむなく季節民宿として開業した。そして、開業から3年後の1978年にテニスコート造成の許可がおりたため、他の2つの民宿と共同でクレーコート10面を造成し、そのうちの3面を所有して、通年営業のテニス民宿へと転換した。そして、多くの学生テニス客を迎え入れることができるようになった。しかし、テニス合宿では最低4面が必要であったので、不足分は共同でテニスコートを造成した他の民宿から借りることによって補った。

その後、1993年に先代の配偶者に当たる現在の経営者が跡を継いだ。1995年には車で15分くらいの場所にサッカー場を造成した。翌年には他出していた子供世代が戻り、民宿経営は息子中心に行われるようになった。2000年には、以前に共同でテニスコートを建設した民宿からテニスコートを買取り、そのうちの5面をオムニコートに、残

りの5面をフットサル場へと改修した。テニス民宿に移行した頃から所有しているマイクロバス1台でテニス客やサッカー客を送迎している。労働力は家族に加えて、創業時より繁忙期に2～3人を臨時で雇っている。

現在の主な利用客は、春季と夏季の学生テニス合宿客、週末の少年サッカー客、夏季の一般の海水浴客である。学生テニス合宿は5泊が中心で、その多くが初回は旅行業者を通すが、二回目以降は直接申し込んでくるようになった固定客である。しかし最近ではその数は減少している。少年サッカー客は小中学生の部活動やクラブ活動によるもので、1泊から2泊くらいで年に数回利用するものである。これらも固定客が多いが、新規の客が増えたり、利用回数が多くなる傾向があり、現在ではテニス客よりも少年サッカー客のほうが多くなりつつある。また、夏季の海水浴客については毎年来る固定客を受け入れるのみで、全体に対する割合は小さい。温泉については源泉から遠く離れていて、配管工事費等に多額の経費が必要なため断念した。また、今後も温泉を目的とする客を誘致する計画はない。

このように民宿開業当初はテニス客を中心に経営を行っていたものの、1990年代からサッカー客を取り入れはじめ、現在ではテニス客よりもサッカー客に重きを置いて経営を行っている。

### 3) テニス型の事例 (D 民宿)

D 民宿は、現在の現経営者の先代が1970年頃に夏季営業の民宿として開業した。当時は、主屋と物置のあわせて3部屋を宿泊室として利用していた。この頃は、夏季の海水浴客が中心であった。

1975年にクレークコート3面を現在のメインコートのある位置に造成するとともに、木造2階建て10部屋の宿泊棟を建設し、通年営業へと移行した。そして、1980年に新たにクレークコート10面を造成し、現在の鉄筋造3階建て13部屋、食堂、広間付の建物を建設した。その後、1980年代後半に小規模な団体の送迎用にマイクロバスを1台購入した。この時期までは、すでに述べた2つの類型の民宿と大きな差がなく、テニス客を中心とした

経営を行っていた。

しかし、1990年に最初に造成したクレークコート3面のある場所に合同でメインスタンド・メインコートを建設する話が持ち上がった。D 民宿ではこの計画に賛同することができなかったので、そのクレークコート3面を売却した。そして現在は民宿から離れたクレークコート10面のみを所有している。現在の労働力は経営主と妻、息子夫婦と父で、繁忙期には掃除担当として臨時に1人雇っていることを除いては、ほとんど家族のみで経営している。この状況は、開業以来ほとんど変化していない。

現在は、2月中旬から3月末までの学生のテニス合宿が中心となっている。テニス合宿は1団体による貸切りで6泊くらいが多く、その多くが固定客で旅行会社を通して予約している。白子町で行われているテニス大会については、ほとんどすべてに参加している。しかし、テニスコートが宿から遠く、また種類もクレークコートであるため、大会本戦はほとんど行われず宿泊のみの利用が多い。夏季にはテニス客は少なく、おもに家族連れの海水浴客に利用されている。

また、1989年に温泉を導入したが、浴場の大規模な改修は行わず、既存の浴場に温泉を引いた。そのため、日帰り入浴客も受け入れておらず、温泉を利用するのはテニス客が中心となっている。

近年、この地区の民宿で増加している高齢者層やテニス以外のスポーツを目的とした客の受け入れについては、専用の施設を所有していないため現在行っていない。また、今後も設備投資をする予定はなく、現在の経営規模を維持していくつもりである。

### 4) 既存民宿型の事例 (E 民宿)

E 民宿は、中里地区の中で最も開業年次の古い民宿で、現在は2代目が妻とともに経営している。鉄筋2階建ての宿泊施設には8畳の部屋が10室あり、30人から40人程度の宿泊が可能である。

1964年にE 民宿を始めた契機は、中里海水浴場の開場を受けて、中里東部の自治会内で海水浴客用の民宿を開業しないかという提案が持ち上がっ

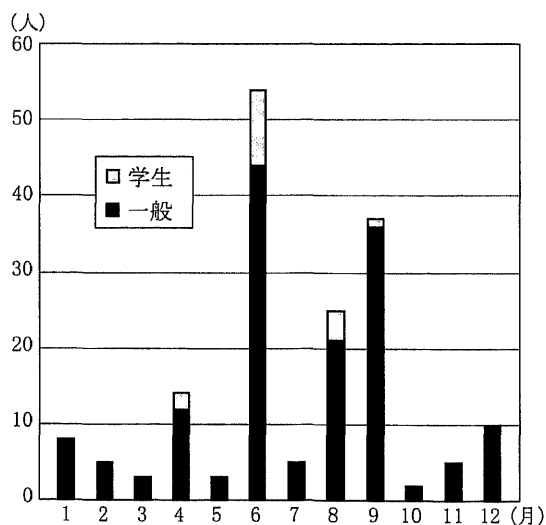
たことであった。この提案に、E民宿の先代のほか3軒が賛同し民宿を始めた。E民宿では、開業以前には先々代の始めたパン製造工場を家族ほか従業員8人で経営しており、農業は一切行っていなかった。民宿創業当時は、主屋とは別に木造2階建ての宿泊施設をパン工場の裏に建て、パンの製造と民宿を兼業していた。民宿は家族連れの子を対象に1泊2食で700～800円に料金設定し、夏季のみの営業であったため、収入の中心はパン製造業であった。

しかし、1960年代後半からとくに1970年代には、収容人数の30人を超え、時には50人を宿泊させなければならぬほど急激に海水浴客が増加した。当時、E民宿の接している海岸に向かう通り沿いには同様の季節民宿が立ち並んだ。同時期から、E民宿では冬季に茂原市内の日立製作所で働く季節労働者も受け入れるようになっていた。このような宿泊者数の増加にともない、1974年にパン製造業を廃業して民宿経営を通年化し、さらに海の家を開業した。その際、工場の跡地に現在の鉄筋建て宿泊施設を建てた。中里地区でテニスコートを設置する計画が持ち上がった際には、軽井沢への視察団に加わるなどE民宿も積極的に活動していたが、E民宿では農地が無かったため、結局テニスコートを設置できなかった。この時期から、中里地区にはテニスコート利用客が急激に増加し、周辺の民宿がテニス民宿へと変わっていった。しかし、E民宿では同じ規模を維持し、九十九里海岸を利用する観光客を主な対象とした経営を続けた。テニス客が増えたことにあわせて併設の小料理屋では昼食も出すようになり、年間400組の宴会客を受け入れたこともあったが、その後客が減少し1995年に小料理屋の営業を中止した。

E民宿の特徴は、中里海岸に海の家を所有していることである。海の家を開業した1974年頃は、1日約400人が利用し、100本の貸しパラソルが午前中で完売するほど海水浴客が訪れていた。この当時は、中里海岸に海の家組合があり7軒が所属していたが、次第に減少し、2005年現在では建設

業者が経営する海の家、飲食店が出店している海の家、およびE民宿が経営する海の家のみである。E民宿の経営する海の家は、500㎡の広さがある。7月の下旬から盆までの繁忙期には、平均して1日150人程度の来客があり、10人から15人のアルバイトを雇って対応している。主な業務は、パラソルや遊泳具などの貸し出しや休憩場所の提供、飲食物の販売である。近年、中里地区にも幾つかコンビニエンスストアが立地したため、海岸への飲食物の持込が増え、海を家の利用客は減少しつつある。このような中で、E民宿では旅行代理店と提携し、学生を対象としたバーベキューセットの販売を夜間に行うようになった。

E民宿の宿泊者を見ると66%は千葉県内から訪れる20歳代、30歳代を中心とした若い世代であり、5月の行楽シーズンと7、8月の海水浴シーズンに集中している(第23図)。50歳代以上の利用客は、食事が主な目的で、12月の忘年会時期が中心となる。テニスコートを利用する学生客を受け入れることは稀であり、利用の中心が九十九里海岸に観光、または遊泳で訪れる地元客であるという点では、開業当時からはほぼ変化はない。E民宿では、旅行代理店との提携や広告を出すことも検討



第23図 E 民宿における宿泊者数の月別推移 (2003年)

(聞き取り調査により作成)

しておらず、地元出身の固定客の獲得から口伝で集客していきたいと考えている。また、今後は、砂浜を利用したビーチサッカーやビーチバレーなど九十九里海岸を活用した地域の観光PRを検討している。

#### V-4 類型別の経営特性と相互関係

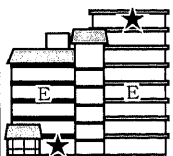
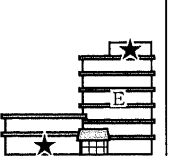
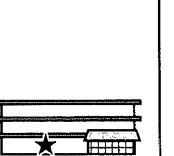
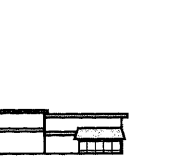
先に述べたように、中里地区の民宿を経営規模と経営形態に基づいて類型化し、施設やその立地、さらに個別の経営事例を検討した。これらをまとめ、類型別の特性を第24図に示した。

大規模複合型の民宿は、いずれも設備投資に積極的で、テニスコートや温泉に加え、近年ではグラウンドゴルフ場など新しいスポーツ施設を導入し、それらの増改築を繰り返している。また、広大なスポーツ施設に見合う大規模宿泊棟を有し、経営を維持するために多くの家族外労働力を雇用している。従来のテニス客を中心とした経営に加

えて、高齢者など一般観光客の獲得など通年集客へと向かっており、近年では経営が多角化している。各々の施設の設置時期をみると、いずれも類型の中で最も早く導入している。新しい取り組みに際しては中心的な役割を果たしており、中里地区の観光地化を主導してきた存在である。

スポーツ複合型は、既存のテニスコートを中心に据え、体育館、サッカー場などその他のスポーツと結びつけた経営の展開を図っている。設備投資に対しても、大規模複合型について意欲的に取り組んできた。オムニコートを所有しているため、近年では大規模複合型のようにグラウンドゴルフ客の受け入れを模索している民宿も多く、また半数の民宿が温泉を導入していることから、今後は大規模複合型のようにますます経営が複合化する可能性がある。

テニス型は、既存のテニス客の獲得を継続しながら、一定の水準の経営を維持している。テニス

		大規模複合型	スポーツ複合型	テニス型	既存民宿型	
施設	宿泊施設の外觀 ★：温泉施設 E：エレベーター					
	宿泊施設収容人数	247人	163人	148人	22人	
	温泉施設所有の比率(%)	100%	60%	0%	0%	
	設備投資回数(増改築含む)	6.4回	5.1回	3回	0～2回	
テニス	面数(オムニコートの割合)	26.3面 (89%)	11面 (50%)	11面 (0%)	なし	
	立地(メインコートからの距離)	283.2m	436.6m	554.6m	..	
	導入時期	1975年頃	1981～84年頃	1984年頃	..	
労働力構成(常勤・臨時の人数)		家族外労働 (常12・臨10)	家族外労働 (常3・臨3)	家族外労働 (常2・臨6)	家族労働	
利用客の傾向	利用客の比重	第1位	テニス	テニス	テニス	海水浴客
		第2位	ゴルフ・温泉	その他スポーツ	海水浴客	宴会客
	テニス以外のスポーツ	グラウンドゴルフ ゲートボール	卓球・陸上 サッカー 野球・バレーボール	なし	なし	
	平日客の有無	あり	一部あり	ほとんどなし	なし	

第24図 白子町中里地区の民宿における類型別の特性

注：図中の数値はすべて平均値とする。

コートが最初に導入された1980年代までは、上記の類型同様に積極的に設備投資をおこなってきたが、立地条件の不利さなどから導入以降はほとんど設備投資をおこなっていない。テニス客や夏季の海水浴客を中心に受け入れるため、集客時期が限られる傾向にある。テニス客の利用が減りつつある地域の現状を考慮すると、テニスだけに依存したこの型は今後減少していくと考えられる。一方で、テニスや温泉を導入しなかった既存民宿型は、開業当時から経営の方向性をほぼ変えず、おもに夏季の海水浴客や宴会客を中心に家族労働で維持してきた。

これら4種類の相互関係を時系列的にみると、1960年代の民宿創業当時は、現在の既存民宿型と同じような夏季の海水浴客用の民宿が地域の中で中心的な地位を占めていた。このような民宿の経営を大きく変化させたのが1970年代のテニスコートの導入であり、テニス客の集客の有無によって現在まで経営の内容が異なったものになった。1980年代以降、次々とテニスコートが設置される中で、コートの増設やオムニコートへの転換など積極的に投資してきた規模拡大型のテニス民宿と、コートの設置以降は現状を維持していこうとする経営規模の比較的小さいテニス民宿へと分化していった。後者は、バブル期にも規模拡大することなく、結果的にテニス客の集客に強く依存したテニス型となった。一方で、前者の規模拡大型の民宿は、バブル期以降さらに設備投資していったが、いずれもテニスを中心とした経営を維持しつつも、テニス以外の集客を模索するようになった。バブル崩壊以降、テニス客の減少により、これら2類型の方向性は分かれ、収容力のある施設を活かしつつ一般観光客を取り込む大規模複合型と、スポーツに焦点をあてて複合化したスポーツ複合型に移行した。

このように地域内で経営が多様化している背景には、立地条件や資金面の問題、家族労働力の状態など個別の要因もあるが、地域内で経営の差別化を図ることによって1つの観光地として幅広い層の顧客に対応してきた結果であるともいえよ

う。九十九里浜以外に観光対象の少なかった中里地区にとって、他地域とは異なる独自性を持つためには、常に新しい観光資源を自ら作り出すことが必然であった。テニス民宿観光地として確立された現在でも、その姿勢は各々の民宿の中で維持されている。旅行者の観光形態が多様化しつつある状況を鑑みると、今後は類型の違いがますます不明瞭なものになると考えられる。

## VI 観光地化に果たす地域社会の役割

### VI-1 地域社会における観光地化への取り組み

#### 1) 地域リーダーの存在

先に述べたように、中里地区における観光地化は、地域住民が主体となってなされたものであった。それらの過程で、各々の経営者が個別に意思決定をしつつも、地域がまとまり観光地となった背景には、彼らを結び付ける地域の社会的な関係や、基盤となるコミュニティとの関わりが指摘できる。その要となったのが、中里地区における地域リーダーの存在である。

以下では、民宿経営およびテニスコートを最も早く取り入れたS氏と、当該地域に温泉を導入したK氏のライフヒストリーを踏まえ、彼らをとりまく社会関係を分析する<sup>40)</sup>。

両者のライフヒストリーを分析すると、第2次世界大戦終了まもない1948年、S氏、K氏ほか中里地区の住民7人が参加して、澱粉工場が設立された。当時、白子町で生産された甘藷は飯岡町や旭市に運ばれ澱粉に加工され、出荷されていた。そのため、甘藷の生産過剰の年には、加工側に買い叩かれるなど、中里地区は原料供給側として不利な条件にあった。S氏らはこの点に注目し、地域内に澱粉工場を設立し、自力で加工流通していくことで、生産農家へも利益を還元していく方法を考案した。この工場設立には、当時の中里地区東の自治会長や、地域の「長老」と呼ばれていた人物など、地域社会の要人も参加しており、個別農家の取り組みとして完結せず、コミュニティを包括した形で進行していた点が重要である。

同様の動きは、地域の重要な産業であった水産



加工業についてもみられた。澱粉工場の経営が軌道に乗ると、S氏らは各々が自営していた水産加工場の設備に着目し、1953年に製氷工場を設立した。中里地区で漁獲してきたイワシを保管する冷蔵庫はあったが、イワシが豊漁の際に余剰分を保管するための氷や冷凍施設がなかった。そのため、イワシの質が落ちて売値が下がったり、その対応策として当時製氷工場のあった銚子や旭、勝浦、館山まで氷を購入しにいかねばならなかった。この製氷、冷凍工場の設立によって地域に氷を提供し、中里地区の水産加工業を発展させようという提案には、S氏、K氏、先に挙げた地域の「長老」ほか中里地区の住民2人が加わった。この製氷工場は、その後まもなく訪れた漁獲高の大幅な減少により経営は困難になったが、その後の代替産業を模索する意欲へとつながり、地域内でさらに新しい取り組みを生むきっかけとなった。

中里地区が観光産業に注目するようになったきっかけは、当時増加傾向にあった海水浴客のために、S氏らが1964年に中里海岸への入り口を広げ道路を整備したことであった。その年の海水浴客が大幅に増加したことを機に、S氏を含む4軒が地域内で民宿の経営に乗り出した。しかし、中里海岸は波が荒いため、天候や季節によって海水浴客の入込が減少することがわかると、すぐに海に代わる観光資源として中里地区にプールを建設するという計画が提案された。プールの建設には、民宿や海の家経営者のみならず、多くの地域住民の賛同が得られた。建設資金を集めるために、中里地区東の住民のほぼ全員が株を持ち、地域で株式会社を設立して共同経営を行うことになった。このプールの建設は結果として、地域内の民宿の増加につながり、中里地区が観光地となる契機となった。プール客が多く訪れた頃は、住民にも毎年配当金が支払われるなど、観光産業の発展のみならず地域社会へ利益を還元することができた。そして、前章までに述べてきたように、S氏やK氏らは、この後、テニスコートや温泉を導入するなど、民宿の経営に対しても次々と新しい観光対象を取り入れていった。

このように、中里地区がテニスという一つの観光対象によって結束してきた要因の1つとして、テニス民宿経営以前から、地域内に新しい産業を興そうとするリーダーやそれに賛同するグループが基盤として存在していたことが指摘できる。現在でも、その多くは大規模複合型の民宿の経営者として、地域をリードしている。彼らは、常に社会の新しい動向に対して敏感に反応し、そのつど情報収集をおこない、時代の流行を先取りしてきた。このような気質は中里地区の地域全体に共通しており、多くの住民は常に新しい物事を導入していくことに積極的であり、その試行錯誤の過程での視察や勉強会にも意欲的に取り組んできた。また、地域内での連帯意識が強く、新しい発想があれば、すぐに仲間同士で結束して取り組んできた。それは、S氏の「(澱粉工場の設立は)一人では無理だが、同士、仲間を募れば容易にできることだと思ひ(略)」という記述からもみてとれる。地域のリーダーの存在だけでなく、彼らの新しい発想に地域全体が運動して取り組んできたことが、中里地区の観光地化の特徴であるといえよう。

## 2) 同族組織の役割

上記のような観光地化における地域内の結びつきを強固にした要因の1つは、民宿の経営者に多くみられる同族組織間の連携であると考えられる。中里地区の民宿は幾つかの親類関係によって構成され、同姓の世帯は近縁か遠縁かの差はあるが、何らかの血縁関係を持っているといわれている。近年では、地域内でも本分家関係を意識することは、冠婚葬祭以外に極めてまれであるが、民宿経営者同士は自身がどの経営者と血縁関係にあるか良く認識している。各経営者への聞き取りにおいても、民宿を始めたきっかけや、テニスコートを導入したきっかけとして、血縁の先駆者の影響を挙げることが多い。例えば、血縁者がテニス導入後、その他のスポーツ施設を導入して集客力を高めたことを契機に、自身も同じようにスポーツ施設を導入したという事例もみられた。施設を建てる際には、血縁者に頻りに相談に行っており、その他のスポーツ施設による集客の方法などにつ

いても助言してもらった。

上記のように、同一姓の経営者同士では、設備投資におけるアドバイスのみならず、資金面での相互援助もみられた。また、テニスコートを設置するための農地転用の際には、土地の貸し借りが行われた。この点で、観光施設の規模拡大への後押しとして、経営者同士の連帯が大きな役割を果たしていたと考えられる。

注記すべき点は、いずれの姓においても大規模複合型の民宿が含まれていることである。新しい取り組みに対して、彼らが常に先導し、それぞれ血縁関係を通じた縁者に強い影響を与えてきたことも指摘できよう。

## VI-2 同業者組織の形成と観光地化

中里地区がテニス民宿の観光地として確立してきたことに伴い、あらたに同業者を中心とした組合組織が次々と設立された。民宿が類似の経営内容であった時代は、1つの民宿組合により地域はまとまりをみせていた。その後、テニスコートや温泉設備の有無により、さらに温泉旅館組合、スポーツ振興ホテル組合が別々に設立されるようになると、経営者それぞれが同じ経営方針をもつ仲間同士で結びつきを強めるようになった。

一方で、経営拡大を続ける民宿経営者と地域社会との関係も同時期に変化し始めた。その変容の一端を中里地区の東コミュニティにおける世帯構成から確認することができる。

中里地区東自治会は北から3班に構成され、1班は45～46軒、2班14軒、3班は39軒が所属している。元来、2班にも、1班や3班同様に25～26軒程度の世帯が属していたが、1970年代以降に一般世帯が減少し、テニス民宿の経営世帯が2班に集中するようになった。これは、各民宿の宿泊棟やテニスコートの敷地面積が拡大するにつれて、近隣世帯と交渉し、白子町内外の所有地と代替して転居を進めてきたためである。このような移転は、とくにテニス民宿の大規模化が進んだバブル経済時期までに多くみられた。また、1班と2班の境に位置する町道101号線も、2000年から拡張

工事がなされ、道路沿いの数件の世帯が移転した。一方では、経営不振から町外へと転居していく民宿もあり、観光の景気動向によって、世帯の構成が変化するという現象もみられた。

このように民宿が増改築を繰り返す中で、とくにテニス民宿が多く立地する2班の通り沿いは、高層の建物が立ち並び、民宿群の入り口にはゲートが建てられるなど、景観的にも、周囲とは異なる風貌を見せるようになった。また、林立する宿泊棟合間には、飲食店や土産物屋、テニスショップも建てられるようになった。加えて、観光客の増加により、夜間の騒音などが生じ、民宿側は地域社会との間に問題を抱えるようになった。著しい観光地化の反面、民宿側は景観のみならず、地域社会とは少なからず隔絶的な存在へと変化していったといえる。

しかし、バブル経済期以降、従来のような大規模投資に頼らないような経営方針が模索されるようになると、しだいに地域との結びつきを維持し、さらに強化しようとする民宿側の動きがみられるようになった。

## VI-3 観光地と地域コミュニティとの共存

地域コミュニティとの結びつきを維持していこうとする動きは、とくに民宿経営世帯の女性らによる積極的な社会活動への参加から読み取ることができる。ここで地域の女性を対象とした2つの社会組織「子安講」と「むつみ講」を例に考えてみる。

中里地区の子安講は、茂原市の子安神への信仰行事を司るために、毎月1度平日の昼間に中里公民館に集まるものである。子安講は、若妻と呼ばれる20歳代の女性から50歳代の女性によって構成される。参加者は、会費として毎回100円を支払い、輪番制による当番が茶菓子を準備する。このほかに、毎月積立金をおこない1年に1度慰安旅行に出かけている。年末年始には鏡餅を作って振舞ったり、2月にはイヌ供養をおこない、毎月1度、オセン米をいただきに必ず茂原の子安神まで参拝するなど、古い慣習がかなり維持されている。

近年では、行事を維持しつつも、その祭礼としての性格は薄まりつつあり、会を維持するための負担の重さから代替わりで入ってくる若妻世代の女性はほとんどいない。

子安講に参加していた50歳代の女性は、新妻が嫁いでくることを機にむつみ講へと移行する。むつみ講は、毎月1度お茶会と称して公民館に集まるものである。祭礼的な行事は全く無く、現在では子安講を引退した女性たちの交流の場となっている。そのため、参加への強制力はなく、子安講を引退してもむつみ講へ参加しない女性も増えつつある。

子安講、むつみ講とともに、地域が農・漁業で栄えていた時代は、同じ生業に携わる女性同士にとって重要な情報交換の場として機能していた。しかし、農家、漁家が減少し、地域内の就業構造が多様化していくにつれて、地域に果たす役割は薄れつつあり、この傾向は当該地域に限られたことではない。

このような中で、現在この子安講とむつみ講の参加者を見ると、その大半が農・漁家ではなく、民宿経営者の女性であり、地域社会の伝統的な社会組織を維持することに彼女たちが一定の役割を果たしていることがわかる。とくに、子安講に参加している若い世代の女性は、そのほとんどが大規模複合型やスポーツ複合型民宿の経営者の配偶者である。若い世代の新規参加がみられなくなる中で、彼女たちは若い頃から参加し、多忙な仕事の合間をぬって必ず集まりに参加してきた。地域社会の声を少しでも経営に反映していきたいという意見からも、女性経営者らが、コミュニティ内の社会活動を地域住民との交流の場として位置づけ、積極的に活用していることが分かる。

このような社会活動への積極的な参加のみならず、民宿経営者側は中里公民館の新設に援助費用を捻出したり、海側沿いの道に桜を植樹したり、集落の通り沿いにマツバギクを植えたりするなど、観光地化とは異なる形で地域へ貢献していくようになった（写真5）。このような動きは、観光地としての中里地区に対する考え方にも影響を

与えており、テニスによる他の観光地との差別化に加え、九十九里海岸を利用したイベントや伝統的な地引網漁の体験など地域資源を活かし、地域に根ざした観光対象を開発すべきだという声も多く聞かれた。観光地として発展し続けながら、このような新たな動向も重視しつつ、いかに民宿経営者と地域社会が共存していくかが今後の課題となるであろう。

## Ⅶ おわりに

本報告では、千葉県九十九里浜に位置する白子町中里地区を対象地域として、テニス民宿業の発展による観光地化のプロセスとその地域的要因について検討した。

九十九里浜の観光は、明治期における一宮町の別荘開発に始まる。当時の九十九里浜は、海軍高官らの避暑地として位置づけられていた。しかし、九十九里町、一宮町に海水浴場が開設され、夏季の海水浴地として近隣の一般客を受け入れる観光地へと発展していった。このように、九十九里浜では海水浴を中心とした観光形態の基盤が、昭和戦前期までに形成されたと考



写真5 白子町中里地区における桜並木が植樹された海岸通

中里地区の海岸沿いの街路にはスポーツ振興ホテル組合によって植樹された桜が立ち並んでいる。2月下旬には白子町主催による「桜祭り」が開催されるなど、街区の美化のみならず観光資源としても利用されている。

(2005年5月 中村撮影)

えられる。一方で、宿泊場所は旅館、高級別荘地に限られるなど、滞在を伴う海水浴が広く一般に普及するのは、高度経済成長期以降であった。

1960年代以降、九十九里浜の観光客は急激に増加し、各々の観光地は著しい変貌を遂げた。このような変化の背景には、交通網の整備と季節民宿の増加が挙げられる。京葉を結ぶ主要道を起点に、千葉市から九十九里浜まで高速道路が整備され、東京近郊から2時間程度で来訪できる海水浴地となった。また、このような県外の観光客が簡易に利用できる滞在スタイルとして、1950年代から民宿が流行した。当時の九十九里浜の集落は、米と落花生を中心とした農業やイワシ漁業、およびその加工を営む半農半漁村としての性格が強かった。主屋の一角を利用して開業できる民宿は、初期投資が少ないため副業としてこれら多くの農家、漁家に受け入れられた。1965年頃から始まったいわゆる海水浴ブームも、九十九里浜の観光地化に追風となった。

このような中で、1964年白子町中里地区に初めて海水浴場が開場され、1967年には4軒の民宿が開業した。観光地としては後発地域であった白子町は、すでに九十九里海岸沿いに優良な海水浴場や民宿が立地している中で、条件的に必ずしも恵まれてはいなかったといえる。先進地域であった九十九里町や一宮町の海水浴場を意識しつつ、中里地区でも海の家や民宿などが次々と導入され、海水浴ブームを背景に次第に観光客を獲得していった。しかし、中里海岸が、片貝や一宮、東金などのように九十九里浜を代表する海水浴場として位置づけられることは容易ではなく、入込客数のみならず、観光地としての知名度も大きく引き離されていた。このため、中里地区では海水浴目的以外の来客の獲得を図ることが課題となった。

現在、白子町が九十九里浜で第3位の観光客数を獲得するに至った契機は、既存の海水浴用の民宿を宿泊施設として利用しつつも、あらたにテニスコートを設置し、そのコートを主たる観光資源

として据えたことである。中里地区では、1974年に16面のテニスコートがつけられ、その後、季節民宿はテニス民宿という宿泊形態へと変化していった。中里地区において、急速にテニスが普及していった要因としては、以下の3点が指摘できる。

まず第1に、テニスコートを設置するための広い土地が存在していた点である。中里地区で民宿を経営していた世帯の多くは2ha程度の広い農地を持ち、そのうち半数は水産加工を営み、干し場を所有していた。農業または水産加工業と兼業していた季節民宿から通年民宿へと経営転換を図る過程で、農地や干し場の跡地を積極的にコートに転用していった。農地は農業振興地域に指定されていたため、除外までの手続きは困難であったが、基盤整備事業により整形された区画はコートの転用に適していた。こうして中里地区では、メインコートを中心に次々とコートが設置され、大規模なテニスコートエリアが築かれた。その反面、農地を持たなかった民宿は、経営転換ができず、民宿経営自体を中止するか、または現在でも海水浴に依存した経営をおこなっている。

第2に、季節性のある海水浴とは異なり、テニス民宿は年間を通して安定して入込客があり、なおかつ集客力がある点である。海水浴客が家族連れの少人数単位であることに対して、テニス客の特徴は企業サークルやクラブなどグループ客を中心とした団体客が多い。また、夏季のみテニスコートを営業する高冷の避暑地とは異なり、中里地区は冬季にも利用可能な点を有利に活用してきた。そのため、毎週末には社会人クラブ、2、3月の特定期間にはテニス合宿の大学生を団体固定客として引き入れるなど、夏季の海水浴客を補うことが可能となった。加えて、参加型のスポーツレクリエーションとしてテニスと海水浴を連動しやすく、繁忙期であった夏季の集客効果へとつながったといえる。中里地区では、このようなテニス自体のもつ集客力をさらに高めるために、全国規模のテニス大会を

誘致するなど積極的に取り組んできた。とくにジュニアの大会開催に力を注ぎ、学校教育機関との提携を図ることで若い世代を中心とした団体の固定客を獲得することができた。

最後に第3点目として、中里地区における地域の結束力が各々の施設規模の拡大に強い推進力を与えたことである。テニスコートを導入する以前から、集落の社会的靱帯を背景に、澱粉工場や製氷工場、プールによる観光開発など地域で新しい産業を興そうとするメンバーが存在してそのつど結束し、その結びつきを強めていた。テニスコートの設置に際しても、地域のリーダーを核とし、彼らの積極的な導入が地域全体への普及につながった。また、これら地縁的な結びつきに加え、民宿経営者が血縁関係をもっていたことも、地域をひとつにまとめ、数々のテニスコートの増設、改装や大規模宿泊施設を開設していく後押しになったと考えられる。

中里地区の民宿を類型化すると、「大規模複合型」、「スポーツ複合型」、「テニス型」、「既存民宿型」に区分することができる。中里地区の民宿の7割は、大型の宿泊施設を伴う大規模複合型やスポーツ複合型であり、観光地として著しく拡大発展してきたことがうかがえる。これらの4類型は、すべて既存民宿型のような海水浴客を中心とした季節民宿経営から始まっており、1970年代のテニスコートの導入の際に、テニス民宿と既存の民宿形態を維持する層に分かれた。大規模複合型、スポーツ複合型、テニス型は、いずれも1980年代後半までは、テニス民宿として同じような性格を持つ宿泊施設であった。しかし、バブル経済の崩壊期以降、テニス客が急激に減少していく中で、その対応の違いから次第に経営形態が分化していった。大規模複合型は、テニス客を中核としながらも、一般観光客の獲得に力を入れ、温泉やグラウンドゴルフ、周遊観光などのプランを取り入れてきた。現在では、

とくに平日における高齢層の利用が顕著に伸びている。既存の大規模施設を利用しつつ集客力を高め、テニスにおいても、一般観光においても地域の中で中心的な存在となっている。スポーツ複合型は、スポーツレクリエーション機能の強化を図り、体育館やサッカー場などスポーツ施設への投資に力を入れてきた。サッカーや卓球、バスケットボール、バレーボールなど他のスポーツとテニスを連動させることにより、大規模複合型とは異なり、若い世代の多目的スポーツ団体の利用が拡大した。一方で、テニス型は、先の2類型のように、新たな投資による顧客の獲得を行わず、既存のテニスコートを利用した固定客の維持を図った。しかし、このテニス型のように、テニス客のみに依存して経営している民宿は少なくなりつつある。実際、中里地区においてテニス以外の客も徐々に増加しており、将来的にはそれぞれの類型でますます経営が複合化していく可能性がある。

テニスという単一の観光対象によって、地域がまとまり、発展を続けてきた中里地区の観光は、近年著しく変容した。現在の中里地区における観光の特徴は、テニス客の減少によるリスクを回避しようと、各々の民宿が顧客のニーズに柔軟に対応してきたため、結果として経営形態が分化し、1つの観光地として多様化していく傾向を強めた点である。この傾向が強まるにつれて、テニス以外の観光対象に力を注ぎ、テニスコートをグラウンドに転用したり、手放す民宿も現れ始めるなど、コート数は減少しつつある。しかし、地域全体としてみると、中里地区の観光は依然としてテニス客の利用によって支えられている。現在の400面のコートを地域全体でどう維持していくかなど、各々の経営は多様化しつつも、テニス観光地としてのイメージを維持していくことが今後の課題であろう。

本稿を作成するにあたり、白子町役場、白子町商工会、白子町民宿組合、白子スポーツ振興ホテル組合、白子温泉組合の方々にご協力いただきました。現地調査に際しては、民宿経営者の皆様に大変お世話になりました。なお、添付図の製図は筑波大学地球科学系の宮坂和人技術専門職員に依頼しました。以上、記して感謝いたします。本報告の作成にあたって、平成16・17年度科学研究費基盤研究(B)(2)「日本の農業の担い手からみた農業維持システムの地域動態的研究」(代表者:田林 明, 研究課題番号16300291)による研究費の一部を使用しました。また、東京空間情報科学センターとの共同研究として平成16・17年度「九十九里地域における産業構造の変容に関する地理学的研究」(代表者:田林 明, 共同研究番号62)により、研究用空間データを共同利用いたしました。

なお、本稿の執筆に際しては、田林がⅠ-1, 星がⅠ-2, Ⅱ, Ⅲ, V-3-2)・3), 小島がⅣ-1, V-1, 中村がⅣ-2・3・4, 井口がV-2, V-3-1)・4), V-4, VI, VII, 金が要旨を担当し、全体の調整は田林と井口が行った。また、渡邊, ワルデチュクを含めて全員で現地調査を行い、データの解析方法とまとめ方について検討した。

#### 【注および参考文献】

- 1) 山村順次 (1995):『新観光地理学』大明堂, 284p.
- 2) 前掲1) 山村 (1995).
- 3) 財団法人日本交通公社編 (2004):『観光読本(第2版)』東洋経済新報社, 284p.
- 4) 前掲3) 財団法人日本交通公社編 (2004).
- 5) 呉羽正昭 (2003):レクリエーションと環境保全. 高橋伸夫編『21世紀の人文地理学展望』古今書院, 231-251.
- 6) 石井英也 (1970):わが国における民宿地域形成についての予察的考察. 地理学評論, 43, 607-622.
- 7) 石井英也 (1977):白馬村における民宿地域の形成. 人文地理, 29, 1-25.
- 8) 山本正三・石井英也・田林 明・手塚 章 (1981):中央高地における集落発展の一類型-長野県菅平高原の例-. 人文地理学研究, 5, 79-138.
- 9) 新藤多恵子・内川 啓・山田 亨・呉羽正昭 (2003):菅平高原における観光形態と土地利用の変容. 地域調査報告, 25, 19-45.
- 10) 白坂 蕃 (1986):『スキーと山地集落』明玄書房, 159p.
- 11) 呉羽正昭 (1991):群馬県片品村におけるスキー観光地域の形成. 地理学評論, 12, 818-838.
- 12) 山本正三・石井英也 (1978):臨海集落の観光地化-伊豆、白浜の事例-. 人文地理学研究, 2, 157-174.
- 13) 尾留川正平・山本正三編 (1978):『沿岸集落の生態-伊豆における沿岸集落の地理学的研究-』二宮書店, 254p.
- 14) 淡野明彦 (1985):沿岸地域における民宿型観光地域の形成-三重県鳥羽市相差地区の事例-. 地理学評論, 58, 19-38.
- 15) 関 信夫 (1976):九十九里浜における観光開発と地域の変容. 新地理, 24-2, 13-42.
- 16) 宇都木宏一・北村 章・中川 健 (1996):千葉県白子町におけるテニス民宿の形成. 筑波大学教育研究科社会科教育コース編「外房の自然と暮らし」, 87-105.
- 17) 前掲1) 山村 (1995).
- 18) 青野は、九十九里海岸とその56kmの海岸線に沿った22の臨海町村(平和村, 太東村を除く)を九十九里浜と位置づけた. この指標を踏まえ、本報告では、2005年現在、海岸線に沿った13市町村を九十九里浜とする. 青野壽郎 (1932):九十九里浜の漁村における二, 三の地理学的現象-九十九里浜海岸平野の地誌学的研究 第2報-. 地理学評論, 8, 690-713, 761-781.
- 19) 森脇 広 (1979):九十九里浜平野の地形発達史. 第四紀研究, 18, 1-16.
- 20) 菊地利夫 (1986):『続・新田開発-事例編』古今書院, 758p.

- 21) 菊地利夫 (1968) : 『房総半島の地域診断』 大明堂, 300p.
- 22) 赤川泰司 (1971) : 九十九里浜平野における施設園芸 (1) - 一宮平野の地域的特色と実態 -. 地理学評論, 44, 254-270.
- 23) 九十九里町史編さん委員会 (1989) : 『九十九里町史 各論編 中巻』 九十九里町, 622-757.
- 24) 前掲15) 関 (1976).
- 25) 白子風土記編さん委員会 (1989) : 『白子風土記』 白子町, 385p.
- 26) 茂原観測所の平年値 (月, 年) のデータは気象庁 (2005) : 電子閲覧室. <http://www.data.kishou.go.jp/index.htm> による. なお, 観測期間は1979~2000年である.
- 27) 青野壽郎・尾留川正平編 (1967) : 『日本地誌 第8巻 千葉県 神奈川県』 二宮書店, 574p.
- 28) 前掲15) 関 (1976).
- 29) 尾崎滄四郎 (1938) : 房總の避暑竝に海水浴場地带 (1). 地理学評論, 14, 20-44.
- 30) 前掲15) 関 (1976).
- 31) 前掲29) 尾崎 (1938).
- 32) この時期, 1963年一宮町に「一宮荘」, 1965年白子町に「白子荘」, 1966年九十九里町に「九十九里センター (現サンライズ九十九里)」, 1967年飯岡町 (現旭市) に「飯岡荘」, 1970年一宮町に「一宮荘新館」, 1972年野栄町に「のさか望洋荘」が設置された.
- 33) 千葉県史料研究財団 (1999) : 『千葉の歴史 別編 地誌2 地域誌』 千葉県, 995p.
- 34) 前掲21) 菊地 (1968).
- 35) 白子町史編さん委員会 (1965) : 『白子町史』 白子町, 1080p.
- 36) 前掲15) 関 (1976).
- 37) 中里地区で1967年に開業した4軒の民宿のうち2軒が2005年現在も経営している.
- 38) 「旅館業法」においては, 宿泊業は部屋数および部屋の広さにより, 「ホテル営業」, 「旅館営業」, 「簡易宿泊営業」, および「下宿営業」に分類されるが, 宿泊施設の名称については規定されていない. 本研究において使用する「民宿」および「ホテル」の名称は, 「旅館業法」上の分類とは異なる.
- 39) 中里地区にゲートボールの利用者が訪れるようになったのは, 1983年に関東甲信越1都7県のゲートボール大会を開催したことがきっかけであった. A民宿でも, 1987年頃からゲートボールの利用客が宿泊するようになったという.
- 40) ライフヒストリーを考察するにあたり, 自伝資料として, 片岡積 (2001) 『回顧七十年』, および篠崎政一 (1991) 『悔いのない人生の歩み』を活用した. また本人の口述によるライフヒストリーが得られなかったため, 後継者世代の聞き取りによって補足した.

## 九十九里海滨的观光区域特性 - 白子町中里地区的网球民宿为例 -

本文以位于千叶县九十九里海滨的白子町中里地区为研究对象，探讨随着网球民宿业的发展向旅游区的过渡和它的地域因素。

九十九里海滨的旅游活动始见于明治时期一宫町的别墅开发，当时作为海军高官等的避暑用地。随着九十九里町、一宫町海水浴场的出现，逐渐变成了附近居民的夏日休闲场所。由此可见九十九里海滨以海水浴为主的旅游形式，早在昭和战前已打好基础，但住宿型海水浴的广泛普及是在经济腾飞期以后。

1960年代以后，九十九里海滨的游客猛增，各旅游地都发生了巨大的变化。其背景有交通网的完善和季节民宿的增加。以连结京叶线的主要公路为起点，从千叶到九十九里海滨开通了高速公路，缩短了与东京的距离；从1950年代开始盛行的民宿，给外地游客提供了方便的住宿条件。当时的九十九里海滨为半农半渔的村落，主屋的一部分就可当民宿使用，因其投资少，很容易被农民、渔民所接受，成了他们的副业；1965年左右开始的海水浴热也是旅游区形成的动力。

1964年，白子町中里地区开始出现海水浴场，1967年有4家民宿开业。白子町在九十九里海滨中作为发展较晚的旅游地并不占优势。无法与九十九里海滨久负盛名的海水浴场片贝、一宫、东金等相比。因此，中里地区需尽早摆脱单靠海水浴的形式，以特色发展吸引其他游客。

如今，白子町的游客数在九十九里海滨排第三位，关键在于利用原有的民宿等住宿设备，铺设网球场，把网球场当作主要的旅游资源。1974年，中里地区建了16个网球场，季节民宿转化为网球民宿。中里地区的网球得到迅速普及有以下原因：

第一是土地的存在。在中里地区经营民宿的大部分家庭拥有2公顷左右的土地，其中有一半家庭从事水产加工，拥有晒鱼场。作为副业的季节性民宿向完全性经营转变的过程中，这些土地被用在地建设。通过基盘整备工程整合了的土地，适合建网球场。围绕着主场地，形成了大规模网球场集中区。与此相反，原先没有土地的民宿业主，无法完成这种转化，或者停业，或者依然单靠海水浴经营民宿。

第二，与明显受季节限制的海水浴不同，网球民宿全年都有稳定的客源，并能达到一定的规模。海水浴客以家庭为主，而网球客的特点是团体客为主。与仅在夏季经营网球的积雪地带避暑地不同，在中里地区冬季也可以使用。周末的社会人俱乐部活动和2、3月份特定期间的大学生网球合宿作为固定客源，与夏季的海水浴客形成互补。中里地区为了提高知名度，积极组织承办全国性的网球赛，尤其是倾力承办少年大赛，加强了与学校教育机构的联系，吸引了大批年轻团体客。

第三，中里地区的社会凝聚力起了强大的推动作用。志在振兴当地经济的一些成员，早在引进网球前就试建淀粉厂、制冰厂以及游泳场旅游开发等新产业，强化了区域社会联系。在网球场地的建设中，作为区域发展的领路人，他们的积极活动，达到了全域普及的效果。加上民宿、宾馆经营者之间存在的血缘关系，把整个地域结合为整体，成了众多网球场地增设、改建、大规模住宿设施建设的推动力量。

中里地区的民宿，可分为大规模复合型、运动复合型、网球型、原始民宿的四种类型。70%的民宿拥有大型住宿设施，属于大规模复合型或运动型。这四种类型都从原始民宿型的以海水浴客为对象的季节经营开始，1970年代随网球的引进分化为网球型和保持原状态的原始型。泡沫经济后，面对网球客剧减的局面，采取不同对策其经营形态再发生了分异。大规模复合型继续重视网球客的同时，为争取其他观光客，新增温泉、小高尔夫球、周游旅游等项目，成为地区旅游发展的核心。体育复合型，谋求运动休闲技能的强化，重点放在体育馆、足球场等体育设施的建设，多种体育项目与网球互动，与大规模复合型相区别。网球型与上述两类不同，继续利用原有的网球设施保证固定客源，但这种类型的宾馆趋于减少。在中里地区，网球游以外的游客逐渐增加，各类型经营走向综合化。

依靠网球这单一观光要素发展起来的中里地区的旅游业，近年发生了巨大的变化。经营方式走向了多样化，削弱了网球客减少所带来的风险，并灵活应对游客的多样性需求。虽然，网球场的数量在减少，但是网球依然是中里地区的旅游重心。